



日本中央競馬会
特別振興資金助成事業

北海道の馬文化と馬の知識



特定非営利活動法人
とがち馬文化を支える会

は じ め に

60～70年前には、私たちの周りには働く馬がたくさんいました。しかし、今では身近に馬を見ることができなくなりました。大げさかもしれませんが、馬と人との6千年の係わりの中で生まれた相互の絆が、日本では消えかかっているともいえます。人類の歴史の中でかけがえの無い存在であった馬たちを再び身近に呼び戻すことはできないだろうか？ 昨年（2007年）、ばんえい競馬の存続運動を契機に設立されたNPO法人とかち馬文化を支える会では、馬文化の啓蒙活動を開始しました。

今回は、社団法人日本馬事協会の平成19年度家畜生産技術向上等特別対策事業（馬生産技術向上推進事業）として北海道地域の馬事知識普及公開セミナー用テキストを作成する機会を与えていただきました。テキストの執筆は、当NPO法人の理事を中心に行うことにしましたが、内容によってはより専門の近い方にもご協力を頂きました。ただし、短期間でのテキスト作成となり、執筆者にはたいへんなご迷惑をおかけし、恐縮しております。本当にご協力ありがとうございました。

平成20年度からはこのテキストを活用した公開セミナーを計画しております。当NPO法人としてはこのような事業は初めての試みであり、試行錯誤の事業ということもできます。しかし、「馬をふたたび身近な動物として社会の中に呼び戻したい」という熱い想いを胸に努力していく所存であります。どうぞ皆様のご理解とご支援を宜しくお願い申し上げます。

平成20年 3 月23日
(第40回ばんえい記念の日に)

特定非営利活動法人 とかち馬文化を支える会
理事長 柏村 文郎

著者紹介（執筆順）

- 旋丸 巴 作家，NPO理事
(dzm01622@nifty.com)
- 古林 英一 北海学園大学経済学部教授，NPO理事
(a-ichi@mba.nifty.ne.jp)
- 河合 正人 帯広畜産大学畜産生命科学研究部門講師
(kawaim@obihiro.ac.jp)
- 三宅 陽一 帯広畜産大学臨床獣医学研究部門教授，NPO理事
(miyake@obihiro.ac.jp)
- 持田 裕之 (有)ウエスタンワールド D-Jランチ代表取締役，NPO理事
(d-jbranch@h2.dion.ne.jp)
- 柏村 文郎 帯広畜産大学畜産生命科学研究部門教授，NPO理事長
(kashiwa@obihiro.ac.jp)
- 川島 種朗 KAZ HORSE TRAINING代表
(uma-kawashima@lake.ocn.ne.jp)
-

表紙写真 山岸 伸

目次

はじめに

第1章	北海道の馬文化	旋丸 巴	1
第1節	馬が継承する文化		1
第2節	信仰にみられる馬文化		5
第3節	文学が描く馬文化		6
	おわりに		7
第2章	北海道の馬と競馬の歴史	古林 英一	8
第1節	北海道の馬産		8
第2節	近代競馬の誕生と成長		10
第3節	道営ホッカイドウ競馬(北海道地方競馬)		12
第4節	ばんえい競馬		15
第3章	道産子(どさんこ)の世界	河合 正人	19
第1節	道産子の生い立ち		19
第2節	道産子の飼養頭数の推移		19
第3節	道産子の体格		20
第4節	道産子の毛色		22
第5節	道産子の放牧管理		25
第4章	農用雌馬の最近の繁殖管理	三宅 陽一	29
第1節	雌馬の繁殖生産性		29
第2節	雌馬の繁殖機能を支配するホルモンとその調節および繁殖特性		30
第3節	発情と排卵の誘起および人工授精の活用		31
第4節	雌馬の繁殖障害と治療		33
第5節	子馬の適切な管理		36
第5章	馬の心理と調教	持田 裕之	38
第1節	馬の心理		38
第2節	馬の調教理念		39
第3節	実践的調教方法		40
第4節	調教方法の具体例		43
第5節	馬の心理と調教の理想		44
第6章	馬の感覚と行動特性	柏村 文郎	46
第1節	視覚		46
第2節	聴覚		47
第3節	嗅覚		48
第4節	音声		49
第7章	乗馬の基礎知識(ウエスタン)	川島 種朗	51
第1節	ウエスタン乗馬の基本理念		51
第2節	乗用馬の種類(品種、特徴)		51
第3節	馬具、馬装、騎乗時の服装		51
第4節	安全な乗馬、下馬		53
第5節	ウエスタン乗馬の基本姿勢		54
第6節	乗馬法		54
第7節	歩法		54
第8節	競技		55

第2章

北海道の馬と競馬の歴史

第1節 北海道の馬産

1. 北海道馬産小史

かつて馬のいなかった北海道にいつ馬がもたらされたかを正確に知ることはできないが、上ノ国町にある15～16世紀頃の遺跡から馬の骨が出土しており、この時期には馬がすでに北海道にいたことが確認される。18世紀末から19世紀にかけ、馬は北海道の各地に広がったとされる。

1870年開拓使が設置され本格的に北海道の開発が始まった当初から馬産は重視されていた。当時の北海道で飼養されていた馬はドサンコであった。馬格の小さいドサンコは駄載用・乗用としては使い勝手がよかったが、プラウやハローといった農具を曳いたり、馬車や櫓を曳くためには非力であり、まず在来馬の大型化が馬事改良の重要な課題となった。

馬は産業の担い手であると同時に重要な兵器でもあった。1901年の北清事変（義和団事件）や1904年の日露戦争を契機として、政府は馬政局（当初は内閣直轄、後に陸軍省）を設置し、計画期間30年という長期的な馬事改良に着手する（第一次馬政計画）。馬事改良の拠点として全国3か所に種馬牧場が設置されたが、そのうち2か所（日高、十勝）は道内に設置された（もう1か所は奥羽）。

この第一次馬政計画のもとで、サラブレッド、アラブ、ベルシュロン、ノルマン、ハクニー、アングロ・ノルマン、トロッターなど数多くの洋種種牡馬が導入された。そのなかの1頭が1910年11月に十勝種馬牧場に配置されたイレネー号（1908年3月14日～1928年5月22日）である。イレネー号は優秀な繁殖成績を残し、十勝地方はベルシュロン系馬の産地となった（十勝ベル）。ばんえい競馬の重賞競走イレネー記念はその功績を記念したものである。また、帯広競馬場入口にはイレネー像がある。ただし、このイレネー像は1930年に建設された最初のものではなく1964年に再建されたものである。

だが、ベルシュロンは馬格が大きく駄載用には適していなかったことから、軍馬としては評価されなかった。牽引力に優れ、日本人の体格にも合

った馬をつくろうという試みもおこなわれた。釧路の馬産家・神八三郎が作りだした日本釧路種（1932年発表）や奏上釧路種（1938年発表）といった馬はそうした試みから生まれた馬である。

1945年8月の第2次世界大戦終結以降軍馬の需要は消失したが、食糧増産・産業復興のため馬の需要は大きかった。馬の増産がはかられ、北海道内の飼養頭数も1953年には29万6千頭に達し、第二次大戦前のピークであった29万8千頭に近い水準に達した。しかしながら、その後はモータリゼーションの普及によって都市鞍馬の需要が激減し、また1950年代終わり頃から農業の機械化が飛躍的に進展し農馬の需要も激減した。

2. 軽種馬の生産

サラブレッド、アラブ、アングロ・アラブ（アラブとサラブレッドの混血種）、およびそれらの雑種（軽半血）をわが国では軽種馬と総称している。図2-1はわが国の軽種馬生産の長期的推移をあらわしている。バブル経済崩壊直後の1993年には12,591頭まで膨らんだ軽種馬の生産頭数は、その後年々減少を続け、2006年にはついに8,000頭を割り込んで7,680頭にまで減少した。7,680頭の95.9%に相当する7,365頭が北海道生まれである（図2-2）。

軽種馬の生産頭数は競馬の成長とともに増加し、日高地方では、1970年代になると米の減反政策の転作作目として軽種馬を選択する農家が多く、その結果、家族経営による小規模な牧場が数多く生まれた。

バブル崩壊後、競走馬需要が縮小するなか、軽種馬生産は厳しい状況に追い込まれていく。一部の良血馬は高く売れるものの、地方競馬を主たるマーケットとしていた比較的種付け料の安い馬は売れなくなった。加えて外国産馬との競合もある。そのため、無理をして高額な良血馬の種付けをおこなったものの、産駒を思うように販売できず、結果的に大きな負債をかかえ、倒産する牧場も数多くみられる。肉牛や他の作目に転換化する牧場も少なくない。

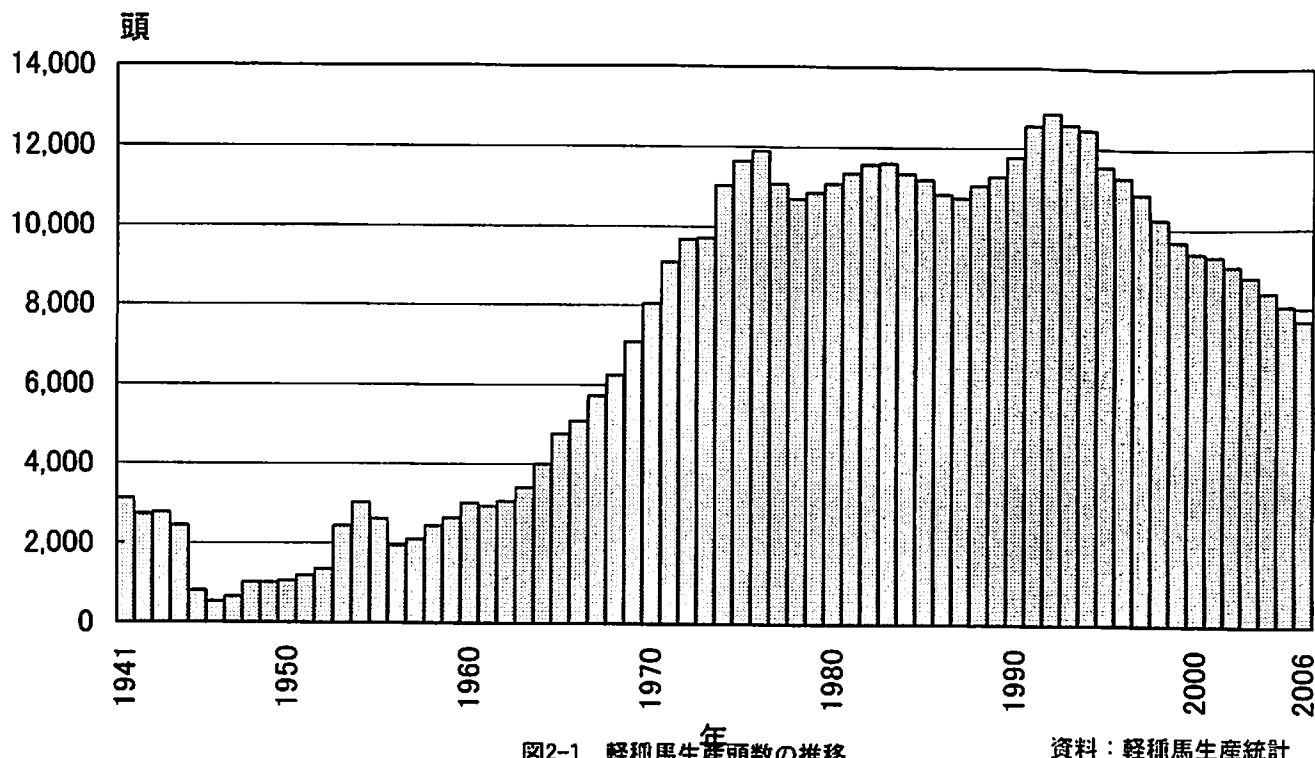


図2-1 軽種馬生産頭数の推移

資料：軽種馬生産統計

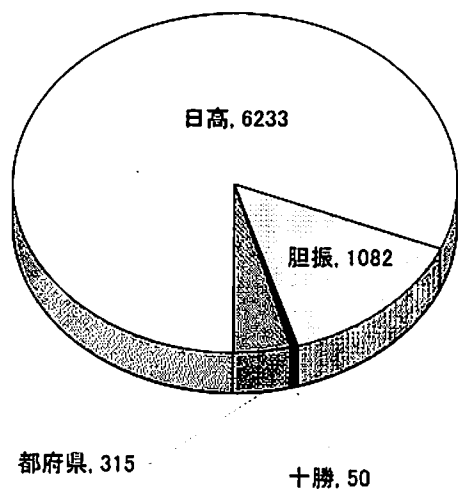


図2-2 地域別軽種馬生産頭数(2006年)

資料：軽種馬生産統計

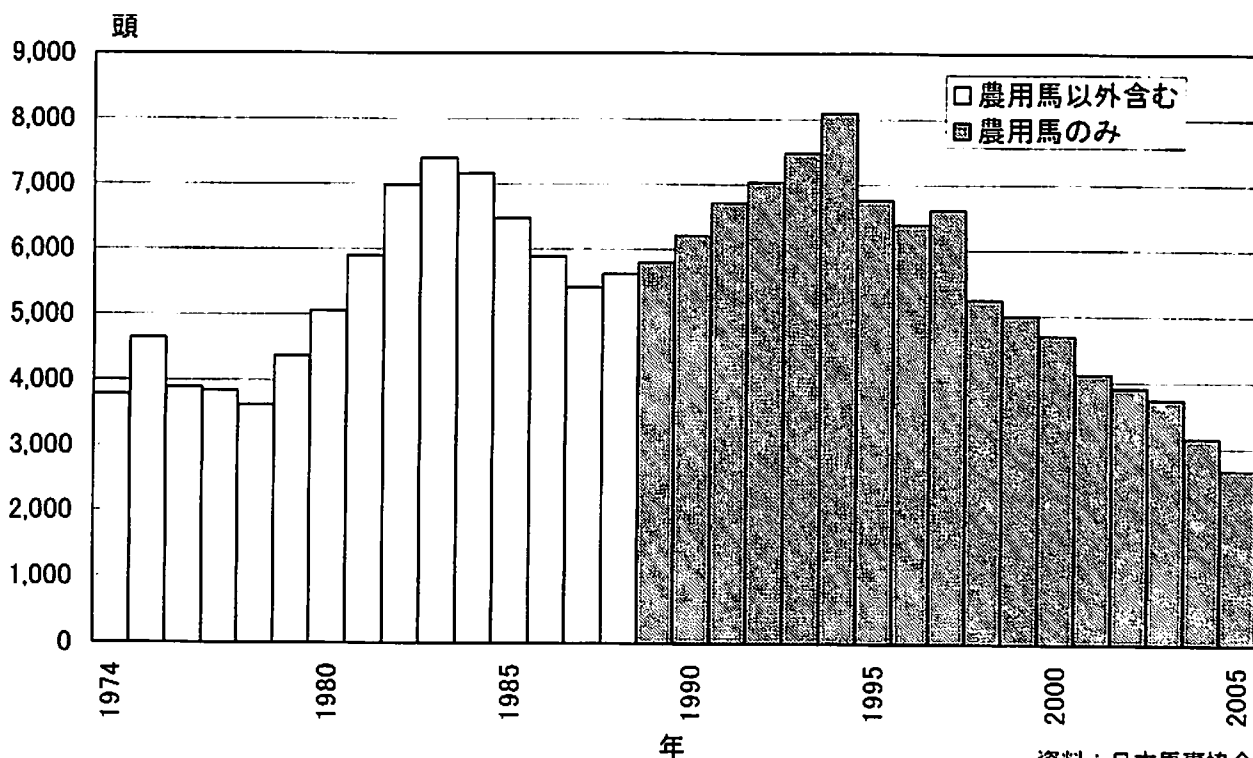
3. 農用馬（重種馬）の生産

統計などで用いられる農用馬という用語は農耕に使用される馬のことではない。ペルシュロン、ブルトン、ベルジャンといった大型の洋種馬、もしくはそれらをかけあわせてつくられた大型馬（2003年産以降は日本挽系種と呼称）の総称である。ばんえい競馬の競走馬といった方がわかりやすいかもしれない。図2-3は農用馬の生産頭数の推移をあらわしたものである。この30年あまりをみると、先にみたサラブレッドの生産動向とほぼ同じ推移を示していることがわかる。

とはいえ、ばんえい競馬の競走馬として供用される農用馬はごく一部に過ぎない。北海道で生産される農用馬の大部分は熊本などに送られ馬肉用に肥育されている。数量的に圧倒的多数が肉用素馬になるとはいえ、農用馬の生産者にとっては、それはあくまで結果であり、生産の基本的な目的はばんえい競走馬である。このことは、ばんえい競馬の馬券発売額と農用馬生産頭数が同じ推移を描いていることからもうかがわれる。つまり、競馬人気が高ければ、競走用農用馬も高く売れ、それが農用馬生産のインセンティブになっているのである。

ばんえい競馬の項でもふれるが、根強い馬肉需要が存在することで、北海道の農用馬の生産は存続しえたのである。つまり、副業的・趣味的におこなわれている農用馬生産を下差さえしているのが馬肉需要であるともいえよう。ばんえい競走馬の需要は年間200頭程度に過ぎない。ばんえい競馬が衰退すると、生産者の多くは農用馬生産から撤退せざるを得ず、競走馬の資質は著しく低下し、結果的にばんえい競馬は存続しえなくなるであろう。

ばんえい競馬の売上高が減少するなかで、競走用農用馬の価格は低落し、肉用馬の価格に接近してしまっているのが現状であるが、それでも競走馬として高く売れる可能性があるという経済的イ



資料：日本馬事協会

図2-3 農用馬生産の推移

ンセンティブがあって、農用馬生産が維持されているのである。

第2節 近代競馬の誕生と成長

1. 近代競馬

わが国における洋式競馬は1861年に横浜居留地の居留民の手によって開催されたのが嚆矢であるとされている。ただ、わが国の競馬が明治期に全く白紙の状態から始まったのかといえばそうではない。例えば各地の神社では祭礼に競馬をおこなっていた。このように考えると、わが国の近代競馬は、古くから存在した祭典競馬を基盤として、西洋から導入された競技が根を下ろし成立したものともいえる。

北海道では、1872年札幌神社（現在の北海道神宮）の祭典で競馬をおこなったのが嚆矢とされている。1879年には共同競馬会社が設立され、これが後の札幌競馬倶楽部となり現在の中央競馬の源流のひとつとなった。

また、函館では札幌より早く1860年代前半に祭典競馬がおこなわれた。1883年には北海道共同競馬会社が設立され、海岸町に洋式の競馬場が開設された。これが現在の函館競馬場であり、北海道

共同競馬会社は後に函館競馬倶楽部となりこれも中央競馬の源流のひとつとなった。

札幌・函館以外でも道内各地でも競馬はおこなわれていた。例えば、帯広では1897年に開催されたのが競馬の発祥であるというし、旭川では1911年に皇太子行啓の際に競馬が開催されその後陸軍の年中行事となった。また、岩見沢では1890年に競馬場がつくれ、翌1891年には祭典奉納競馬がおこなわれたといわれる

2. 競馬の制度化

軍馬改良を目的に、1904年に臨時馬政調査委員会は全国に産馬組合と競馬会を組織させ、競馬の振興をはかることとした。1907年から翌年にかけて、全国15の競馬会が設立された。北海道では函館（1907年）と札幌（1908年）に競馬会が設立された。

1908年に公布された競馬規程では競馬会以外に競馬の開催は認められていなかったが、1910年には地方長官の許可に基づく畜産団体による競馬が認められるようになった。

1908年10月の新刑法で馬券発売は禁止された。しかしながら、馬匹改良のための競馬は必要とされ、1923年の競馬法施行までは競馬場の維持管理

費用や賞金が政府からの補助金として交付される時代が続いた。この時代、北海道では、札幌、函館の各競馬会が開催する競馬の他に、日高、十勝、上川の各畜産組合が競馬を開催した記録が残っている。

3. 公認競馬と地方競馬

1923年競馬法が成立し馬券の発売が認められた。競馬法に基づいて、全国11の競馬倶楽部に競馬開催が認可された。北海道では札幌競馬倶楽部と函館競馬倶楽部2つである。競馬法に基づいて開催された競馬を公認競馬という。

1927年地方競馬規則が制定され、地方競馬という言葉がこのとき正式に生まれた。馬券の発売は公認競馬だけに認められ、地方競馬では馬券の発売は認められなかったが、地方競馬では優勝馬投票券付入場券の発売がおこなわれた。優勝馬投票は景品券が的中者に与えられることになっていたが実際には事実上の馬券であったようだ。

道内では各支庁1か所ずつの計14か所で優勝馬投票が認められた。14競馬場の開催成績をまとめたのが表2-1である。1932年秋季を例にとると、入場券売上高の合計は353,737円80銭であった。1937年の札幌競馬場（公認競馬）7日間の馬券の売得金額が863,950円であったことをみると、当時の地方競馬の売上高が決して少ないものではなかったことがわかる。

地方競馬は、本来、農耕や運搬用に飼養されている馬を使うものであったし、政策的にもそう位置づけられていたが、実際には公認競馬への出走をめざす馬や、公認競馬で走っている馬をアルバイト的に出走させたりしたケースが相次いだ。

公認競馬側は地方競馬との混乱を嫌い、1935年以降公認競馬出走馬が地方競馬に出走した場合は再び公認競馬に出馬登録することを認めない、公認競馬で騎乗した騎手が地方競馬に騎乗した場合は二度と公認競馬への騎乗は許さないといった規制を設けた。ただし、後者については、札幌・函館両倶楽部については例外としていた。こうした設けられた地方競馬との「壁」は第二次大戦後も長らく引き継がれることとなった。

1936年5月競馬法改正案が成立し、同年12月公認競馬の全国統一組織である日本競馬会が誕生する。日本競馬会の誕生により各地の競馬倶楽部は解散した。

4. 戦時統制期

1939年種馬統制法と軍馬資源保護法が制定された。軍馬資源保護法によってこれまでの地方競馬は鍛錬馬競走に衣替えし、競馬場も鍛錬馬場と名称が変更された。鍛錬馬競走は各府県1か所、北海道は3か所以内と定められ、道内の地方競馬は、旭川、岩見沢、帯広の3か所以外はすべて廃止された。なお、この軍馬資源保護法にもとづく鍛錬

表2-1 第2次大戦前の北海道における地方競馬

競馬場	所在地(当時)	主催者	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	日数 合計	有料入場 人数累計	入場券発売 額
			春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋			
江別競馬場	札幌郡江別町	札幌産馬畜産組合		3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	66	200,452	636,312.00
八雲競馬場	山越郡八雲町	道南畜産組合					3	3	3	3	4	3	3	3	40	49,821	209,811.00
今金競馬場	瀬棚郡利別村	檜山畜産組合						3	3						6	9,386	11,761.00
倶知安競馬場	虻田郡倶知安町	後志畜産組合				3	3	3	3	3	3	3	3	3	51	117,337	340,003.00
羽幌競馬場	苫前郡羽幌町	手塩国畜産組合			2	2	2	2	2		3	3		2	27	48,618	60,371.50
稚内競馬場	宗谷郡稚内町	宗谷畜産組合		3	3	2	2	3	2	2	3				20	13,938	33,235.00
根室競馬場	根室郡根室町	根室畜産組合				3	3	3	3	3	3	3	3	3	52	346,250	502,038.00
苫小牧競馬場	勇払郡苫小牧町	胆振畜産組合		3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	51	82,662	299,707.00
日高競馬場	静内郡静内町	日高畜産組合			3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	36	45,390	93,734.00
釧路競馬場	釧路郡鳥取村	釧路畜産組合						3	3	3	4	3	4	4	42	276,278	463,377.00
野付牛競馬場	常呂郡野付牛町	北見畜産組合		3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	4	66	152,097	371,367.00
岩見沢競馬場	空知郡岩見沢町	空知畜産組合	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	72	175,451	663,424.00
旭川競馬場	旭川市	上川畜産組合		3	3	3	3	3	3	3				4	45	173,557	390,752.00
帯広競馬場	帯広市	十勝畜産組合	2	3	2	3	3	3	3	3	3	4	3	4	75	368,579	683,567.20
開催日数計			5	6	20	24	17	28	28	32	29	34	36	40	649	2059816	4,759,459.70

資料：『地方競馬史 第1巻』

馬競走では優等馬票の発行が認められた。

戦局悪化の中で競走馬資源も枯渇し都市部では競馬を開催できる状況ではなくなったため、公認競馬は1943年を限りに中止となり、馬券発売をおこなわない能力検定競走が1945年まで細々とおこなわれた。また1939年にはじまった鍛錬競走も1944年に幕を閉じた。

1945年8月の第二次大戦終結でいわゆる戦時法令は順次廃止となる。馬産・競馬関係では、同年11月に軍馬資源保護法が廃止され、12月の国家総動員法廃止にともなう馬事団体令による団体が自然消滅となった。これら一連の出来事によって、競馬の根拠法が消滅してしまう。

第3節 道営ホッカイドウ競馬 (北海道地方競馬)

1. 進駐軍競馬と馬連競馬

日本競馬会による公認競馬は1946年10月から東京・京都の2場で復活するが、地方競馬はそれよりも早く変則的なかたちで復活する。1946年6月札幌駐留軍が7月14日のアメリカ独立記念日に競馬を開催するよう北海道庁に命令した。道庁は競馬の開催実務を馬匹組合連合会（馬連）に委託し札幌競馬場で競馬が開催された。この時期、法に基づかない競馬（無法競馬、ヤミ競馬、国民競馬などとよばれた）が全国各地で続々と開催され、道内でも函館や室蘭でも競馬が開催されたという。

1946年11月地方競馬法が公布・施行された。ちなみにこの法律は戦後の議員立法第1号であるという。地方競馬法では競馬の主催者は馬連もしくは馬匹組合とされた。

地方競馬法にあわせて定められた地方競馬施行規則第9条で、競走の種類として、駈歩・速歩・障碍の3つに加え、新たに鞍馬が盛り込まれた。このときばんえい競馬が法的に制度化されたのである。

1947年春に地方競馬法が改正され、道内3か所以内とされていた競馬場数が6か所以内になった。これを受け、旧来の岩見沢・旭川・帯広の3場に加え、北見と室蘭でも新たに競馬が開催された。また、この年は馬連主催とは別に、中央馬事会的主催で北海道地方連合地方競馬が岩見沢で開催されている。

2. 道営競馬のスタート

1948年6月連合軍総司令部（GHQ）は日本競馬会、中央馬事会（日本馬事会の後継団体として1945年11月設立）、馬匹組合連合会などを閉鎖機関に指定した。これによって地方競馬の主催団体が消失してしまう。そこで急遽制定されたのが現在の競馬法である。

新しい競馬法では競馬を行うことができるのは政府または都道府県と規定された。日本競馬会が行っていた公認競馬は政府が引き継ぎ国営競馬となり、馬連などの行っていた地方競馬は都道府県が引き継いだ。道営競馬の誕生であった。初の道営競馬は1948年9月23日に帯広で開幕した。ちなみに開幕初戦は騎乗速歩競走であったという。

また、この年、道内の重要拠点として小樽市銭函に小樽競馬場が誕生し、道営競馬の拠点として期待された。小樽競馬場では道営がスタートした1948年に2回8日間が開催され、この年の道営の総売得金額の56%にあたる2,668万円を売り上げた。

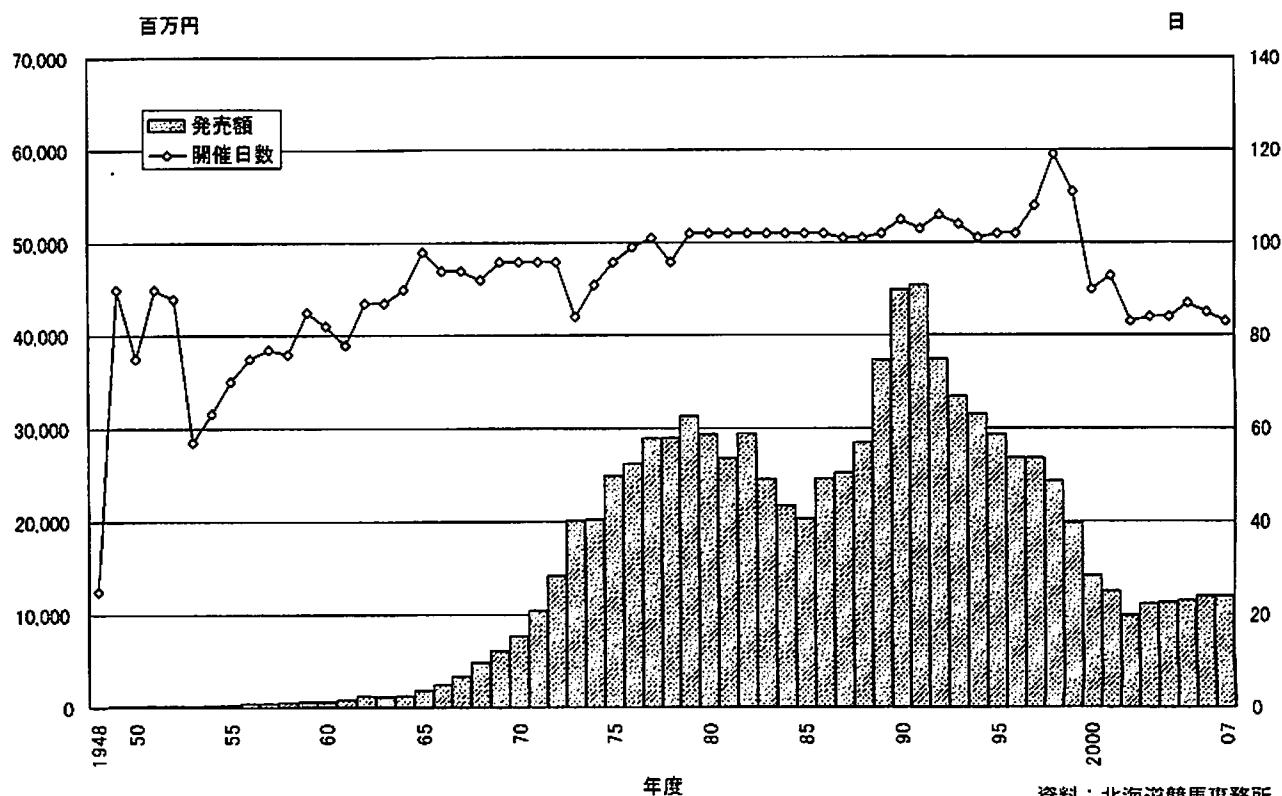
競馬法にしたがって、米軍施政下にあった沖縄県を除く全ての都道府県で地方競馬が開催されたものの、その殆どはわずか数年で廃止されてしまう。道営競馬も不振が続き、1950年から1955年の6年間は赤字となり存廃論議がおこった。多くの府県で競馬が続かなかった理由はいくつか考えられる。

まず、1つめは「ドッジ不況」、2つめは続々と誕生した他の公営競技との競合、そして3つめが競走馬資源の不足である。地方競馬の競走馬は軽種馬以外のアングロノルマンなどの中間種が主体でその大部分は使役馬であった。道営競馬ではドサンコ（北海道和種）によるレースや馬車馬による速歩競走などの珍企画が生み出されたり、26歳という高齢馬が出走・勝利したケースがある。

3. 道営競馬の変遷

1956年の競馬法改正で、競馬場所在地の市町村が指定を受け、競馬を主催することができるようになった。北海道では、帯広、北見、岩見沢、旭川の4市が指定を受け、1953年から市営競馬を開催した。

図2-4は道営競馬の発売額の推移をあらわした



資料：北海道競馬事務所

図2-4 道営競馬の発売額と開催日数

たものである（1965年までは道営のばんえい競走を含む）。1950年代前半の危機的状況を何とか乗り切り、道営競馬は順調に売上高を伸ばす。1950年代後半になるとわが国は高度経済成長期にはいる。

1960年代後半から1970年代の終わり頃まで、中央・地方ともに競馬の売上高は成長を続けまさに黄金時代であった。1970年代半ばには第一次オイルショックによる深刻な景気の後退もあったが、その時期でも競馬の発売額は伸び続けた。そのため「不況に強いギャンブル産業」という神話が生まれたが、これはたまたま第一次オイルショック期がそうだったというだけで全くの神話に過ぎない。図をみても明らかなように、1950年代初期、第二次オイルショック期、円高不況期、そしてバブル崩壊後と大きな景気の後退期には道営競馬の馬券発売額は減少している。

1979年の312.6億円をピークに馬券の発売額は低下を続け、1983年にはついに単年度赤字を計上する。道営競馬のみならず、地方競馬がおよそ30年振りに迎えた危機の時期であった。この時期、南関東の川崎競馬でさえ存廃論議がおこったほどであった。しかしながら、それまでの蓄積もあり、このときに廃止となったのは和歌山県の紀三井寺

競馬だけであった。紀三井寺競馬は冬季休催期間中の道営競馬の出稼ぎ場所でもあった。門別トレーニングセンターが竣工したのが1985年であった。

1980年代後半になると、バブル景気により、馬券の発売額は大きく増加し経営危機は回避された。

4. 長期低迷期の道営競馬

バブル崩壊後の長期低迷は深刻な地方競馬の危機をもたらした。1990年代後半になって全国の地方競馬は再び存廃論議にさらされる。また、競馬ファンは単なるギャンブルとしてではなく、より質の高いレースを競馬に求めるようになっていた。少ない競走馬資源で営まれる地方競馬が高度化するファンの要求に応えられるわけもない。

こうした状況に風穴をあけるべく、1990年代半ばになって中央・地方の交流が本格的に開始される。1995年は交流元年といわれ、中央・地方の統一グレード競走（ダートグレード競走）がおこなわれるようになった。道営競馬でもそれまで招待競走だったブリーダーズゴールドカップが交流重賞（GⅡ）となり、グランシャリオカップ（GⅢ）が新設された（1996年）。翌97年には北海道スプリントカップ（GⅢ）が新設、北海道2歳優駿（当時の呼称は北海道3歳優駿）が交流重賞（GⅢ）

となり、さらに98年にはエーデルワイス賞（GⅢ）が新設された。

道営競馬の収支均衡をはかるべく、収入（馬券売上高）の増大と、支出（開催経費の削減）の両面からいくつかの方策がとられた。ミニ場外発売施設（愛称Aiba）の設置は収入増大策のひとつである。Aibaの第1号は2001年に馬産地日高の静内に設置されたAiba静内で、その後、2002年から2005年にかけて全道10か所に設置され、2008年1月現在では11か所が稼働しファンを楽しませている。

道営競馬の存廃論議が高まるなか、1999年11月、北海道地方競馬運営委員会（岩崎徹委員長、当時）が北海道知事の諮問に対する答申をおこなった。この答申（通称、岩崎答申）は、道営競馬は「産地競馬」であるとし、財政寄与にとどまらない道営競馬の多面的な機能を積極的に評価し、道営競馬の存在意義を明らかにした。

道営競馬は2歳馬の出走比率が高いが、これら2歳馬の多くは3歳以降、道営に留まることなく、中央競馬をはじめ、南関東や他の地方競馬に転出する。道営競馬のもつこうした流通機構としての機能が「産地競馬」の1つの側面である。

道営競馬のこうした機能をより強化・推進したのがJRAの認定競走制度であり、2003年に設けられた認定厩舎制度である。認定厩舎制度は、サラブレッドの生産・育成をおこなっている牧場と道営競馬の厩舎がタイアップする制度である。この認定厩舎制度第1期生としてデビューしたコスモバルクが、中央競馬の皐月賞で2着（2004年4月）したり、国際G1競走であるシンガポール航空国際カップを優勝（2006年5月）したりという大活躍をみせ、道営競馬の人気回復に大きく寄与したことは記憶に新しい。

5. 道営競馬の新生にむけて

～北海道競馬改革ビジョン～

2007年、道は道営競馬の大幅な改革プランを打ち出した。改革プランは、ひと言でいえば、道営競馬を産地に立脚する産地主導の競馬として確立するという理念に基づいたものである。

馬産地の人的・資金的支援によって北海道軽種馬振興公社を競走実施公益法人に改組し、この新公社は北海道から競馬の実施に関する事務を受託

する。新公社による競馬の実施で産地の「民間活力」を活用するというのが具体的な方策である。

また2008年の開催をもって旭川競馬場から撤退し、門別競馬場で長期間のナイター開催をおこない本場化することも計画されている。旭川からの撤退が予定通り行われれば、ばんえい撤退による岩見沢に次いで、旭川でも長い競馬の歴史に幕が下ろされることになってしまう。

6. 道営競馬を楽しむ

道営競馬は例年4月中旬から11月上旬にかけて、JRA札幌競馬場、旭川競馬場、門別競馬場の3か所を巡回開催している。開催日程は年によって一定しないが、2008（平成20）年度は、札幌、旭川、門別の順番で開催される予定で、旭川ではナイター開催がおこなわれる。開催日は原則として火水木である。ただし、上述したように、旭川開催は2008年度限りで廃止される予定である。

なんといっても道営競馬の特徴は2歳戦が数多く組まれていることである。道営でデビューし、中央競馬や南関東で大活躍する馬は数多い。

道営競馬の重賞競走は、H1からH3に格付けされており、2007年度を例にとると、2歳馬戦にH1はないが、交流重賞である北海道2歳優駿が2歳馬の最高峰のレースに位置づけられている。また、2歳牝馬の交流重賞としてエーデルワイス賞がある。JRA認定競走に勝った馬は中央競馬への出走が認められるので、中央競馬の夏の函館・札幌開催に遠征し、好成績をおさめる馬も少なく、函館2歳ステークスや札幌2歳ステークスで活躍する馬もいる。

3歳馬では北海優駿がH1に格付けされている。北斗盃（H2）、北海優駿、そして王冠賞（H2）が、いわゆる3歳馬の3冠レース（中央競馬の皐月賞・ダービー・菊花賞に相当）である。

古馬の重賞には、北海道スプリントカップとブリーダーズゴールドカップという2つの交流重賞がある。2000年の北海道スプリントカップでは道営所属の13歳馬オースミダイナーが優勝し、最高齢重賞制覇の記録を打ち立てている。道営所属馬の優勝は残念ながらこのときだけである。

道内における道営競馬は、上述のAibaの他に、JRA札幌競馬場、ウインズ釧路、ウインズ室蘭、JRA函館競馬場、旭川レーシングセンター、ハ

ロンズ岩見沢、帯広競馬場でも場外発売がおこなわれている。

第4節 ばんえい競馬

1. ばん馬大会

重量物を積載した橇を馬で曳いて競い合うばん馬競走（ばん馬大会）がいつ始まったかは定かではない。ばん馬大会は農村娯楽であったと解説されることが多いが、これは必ずしも正確ではない。馬が生まれるのは農家であるが、馬を使役するのは農家とは限らない。牽引力に優れた馬はむしろ運送業者や森林伐採で使役されていた。ばん馬大会は1960年代までは運送業者たちによって道内の都市部でも盛んに開催されていた。

2. 発足当初のばんえい競馬

公式に馬券発売を伴う競馬（以下、ばんえい競馬）としてばん馬競走を行うようになったのは、1946年以降である。地方競馬法に則ってばんえい競走が行われたのは北海道と、馬力大会の伝統をもつ青森県のみであったとされるが、青森県は1951年の開催を最後に競馬そのものが廃止となっている。

1947年に馬連によって岩見沢と旭川で各2日間

開催されたのがばんえい競馬の始まりであるが、このときは予想外の不振で翌48年は開催されなかった。49年に北海道の主催となりばんえい競馬が開催される。

発足当時のばんえい競馬に出走した馬はすべてが普段は産業現場で働く使役馬であった。馬だけではなく騎手も普段馬とともに働く人々であった。

ばんえい競馬は今日の競技形態に至るまで幾多の変遷を経てきた。例えば、現在のばんえい競馬は直線200mのセパレートコースでおこなわれているが、現在のばん馬大会がそうであるように、発足からしばらくの間はU字型のコースで競技がおこなわれており、すべての競馬場が直線セパレートコースになったのは発足後20年以上を経た1968年のことであった。障害も現在は大小2つの山であるが、かつては途中に溝や難路（砂障害）が設置されていた時代もある。橇も現在は鉄製であるが、これは1971年からでありそれ以前は木橇である。

3. 成長と停滞

1970年代に入りばんえい競馬は大きく発展する。図2-5はばんえい競馬の開催日数と馬券発売額の推移である。1960年代後半間66日に留まっていた開催日数は1974（昭和49）年には102日に増え、

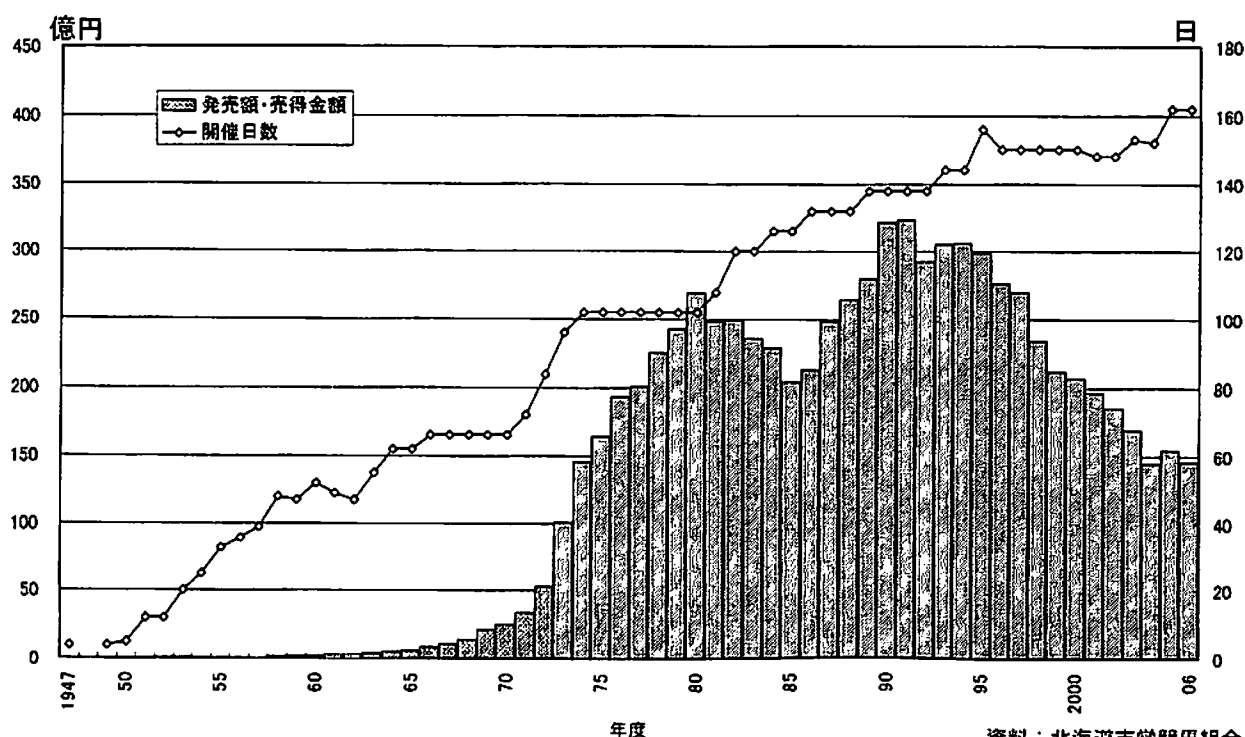


図2-5 ばんえい競馬の発売額と開催日数

資料：北海道市営競馬組合

馬券発売額は1970年の24.8億円が1974年にはその実に5.85倍の145.5億円となっている。発売額の急成長は1980年まで続いた。

1970年代前半のわずか数年間でばんえい競馬は使役馬と使役馬を所有・使役する非専門的騎手によるセミプロ的な競技から、競走専用馬と専門的騎手によるプロ競技に変容をとげた。このことが開催日数の増大を可能としたといえる。この変容を可能とした条件は2つある。

1つは馬券に対する旺盛な需要の存在である。高度経済成長を背景に、公営競技は黄金期をむかえていた。そのなかでもばんえい競馬の馬券発売額の伸びは突出していた。これには、北海道経済の成長と、ばんえい競馬の地盤である道央・道東において競合する競技があまりなかったことによると考えられる。

いま1つは馬産の変容による競走馬資源の供給確保である。すでに第1節で述べたように、使役馬の需要が失われるのに代わり、肉用馬の需要が拡大することで競走馬資源が確保されることとなった。このことは競走馬の劇的な大型化をももたらした。使役馬中心の時代は全体的に今よりもはるかに馬格は小さい。かつては体重が800kgあれば大型馬とされたが、現在なら、デビューしたての2歳馬でも殆どが800kgを超える。

馬券発売額は1980年には269億円に達しピークとなる。だが、道営競馬や他の地方競馬と同様、この頃を境に馬券の発売額は減少に転じる。そのなかで、開催日数の増大、4場の相互場外発売や専用場外発売所などの設置などの対応策がとられたものの、発売額の減少傾向に歯止めをかけることはできなかった。

1986年になると発売額は上向く。これも他の地方競馬と同様である。バブル景気で発売額は年々増加する。そうしたなか1989年4月一部事務法人である市営競馬組合（以下、組合）が設立され、2007年度に帯広市の単独開催になるまで、組合による競馬事業が続けられることとなった。結果論に過ぎないかもしれないが、市営競馬協議会を構成し、4市が直轄事業として競馬を実施していた時代にくらべ、実務的な効率は高まったものの、競馬事業の一切が組合まかせとなり、各市が主催者として積極的な取組を放棄し、それが結果的に3市撤退という事態につながったという見方も可

能であろう。

ともあれ、バブル景気まっただ中、組合設立3年目の1991年には322.9億円という空前の売上高をあげたが、その後は長期にわたる売上減少が続き、1998年にはついに単年度収支が赤字となった。その後も売上高は減少はとどまることがなく、市営競馬組合の累積債務は増大し続け、そしてついに2006年秋の3市撤退という最大の危機を迎えることとなった。

4. 新生ばんえい競馬の誕生

バブル崩壊以降長期化した不況は地方経済により強く打撃を与え、赤字を続けるばんえい競馬は4市の大きな財政課題となっていた。2004年有識者による「ばんえい競馬のあり方を考える懇談会」が開かれ、翌年「ばんえい競馬経営再建5箇年計画」が策定されたものの、2005年度は過去最悪の赤字を計上してしまう。2006年3月、ばんえい競馬を構成する様々な関係者による改革検討プロジェクトチームが発足し、9月には存続に向けたプロジェクトチーム案が発表される。だが、プロジェクトチーム案を無視するかのよう、旭川市の菅原市長（当時）が10月にばんえい競馬からの撤退を表明し、北見市もそれに続いた。帯広+岩見沢の2場開催案も最終的には成立せず、岩見沢市も11月27日には撤退を表明した。ばんえい競馬の火はいったん消えようとした。

こうした主催者の動きに対して、ばんえい競馬の存続を求める声が、まず十勝の生産者から起こり、続いて帯広市民を中心とした存続運動が開始された。存続運動は大きな拡がりを見せマスコミも全国的に存廃問題を報道した。

こうした存続運動を背景に、ソフトバンクの子会社で地方競馬の馬券のネット販売をてがけているソフトバンクプレーヤーズが支援を表明し、帯広市は、ソフトバンクプレーヤーズが新たに設立するオッズパークばんえいマネジメントに、競馬法上民間委託ができる業務の大部分を委託することで、帯広市単独主催によるばんえい競馬の存続が実現したのである。

2007年4月新生ばんえい競馬が開幕した。当然のことながら、これまでの4市巡回開催ではなく、帯広市での周年開催である。夏にはばんえい競馬初のナイター競馬も開催され、新たな市民のレジ

ヤーとして多くの人で賑わった。

また、存続運動の過程で、ばんえい競馬を核として馬文化を地域再生の資源として活用しようという機運が生まれ、NPO法人とかち馬文化を支える会が誕生した。NPO法人は馬に関わる様々なイベントを開催し、馬を地域活性化の資源として活用する試みをおこなっている。

ただ、馬券発売高の長期にわたる減少にともなう、賞金・諸手当（いわゆる報償金）が大きく下がっている。報償費の削減が馬主の競走馬購入意欲を低下させ、その結果、競走馬資源である農用馬の生産頭数が減少し続けている。農用馬生産はばんえい競馬の最も重要な基盤であり、今後のばんえい競馬の存続を左右する大きな問題である。

5. ばんえい競馬の観戦

ばんえい競馬は世界で唯一の競馬である。4月下旬から3月下旬にかけて帯広競馬場で開催されている。2008年度は25開催150日が予定されている。開催日は原則として土日月の3日間である。また5月9日から10月19日の12開催72日間はナイター開催でおこなわれる予定である（ナイター開催期間中は金、土、日）。

走路には大小二つの障碍（盛土）があるが、なんといっても二つめの大きい方の障碍（第2障碍）を越えるところが見所である。第2障碍の上り坂付近で観戦していると、馬の息づかいや騎手のかけ声が聞こえ、ばんえい競馬の迫力を体感することができる。平地競走に比べ格段に速度が低く、第2障碍からゴールまで観客が声援を送りながら馬と一緒に走るのもばんえい競馬ならではの光景である。ただし、ゴール線を櫓の後端が通過した瞬間がゴールインなので、ゴール前に数頭の馬が並んでしまった場合、ゴール前で見てみると櫓の後端が他馬の陰になって着順がわかりにくいこともある。

北海道内の場外発売所は、北見場外発売所、旭川レーシングセンター、岩見沢場外発売所、釧路場外発売所、苫小牧場外発売所、名寄場外発売所、Aiba小樽、Aiba滝川、Aiba中標津、Aiba留萌、Aiba札幌駅前、Aiba千歳、Aiba函館港町、Aiba江別。道外では、BA00高崎、大井競馬場などである。近年ではインターネットやCS放送での中継もおこなわれており、場外発売所以外でもレースを見

ることができる。

重賞競走はBG1からBG3の3ランクに別れており、当該年度デビュー馬のチャンピオンを決定するイレネー記念（3月）、3歳チャンピオンを決定するばんえいダービー、3歳牝馬のチャンピオン決定戦であるばんえいオックス（ともに12月）、5歳馬（オックス・ダービー出走馬より1歳上だが、1月に開催されるので5歳となる）のビッグレースである天馬賞、古馬のビッグレース帯広記念（1月）、古馬のチャンピオン決定戦であるばんえい記念（3月）がBG1に格付けされている。なかでも、ばんえい記念はばんえい重量1トン（牝馬は20kg減）という超高重量戦であり、かつては大臣賞典とよばれ、ばんえい競馬最高峰のレースとなっている。

ばんえい競馬では上位ランクに格付けされるほど積載重量が大きくなる。そのため、平地競走とは逆に上位馬のレースの方が時計がかかる。したがって、ばんえい記念はばんえい競馬の数あるレースでもっとも走破タイムの遅いレースでもある。

【参考文献・資料】

- 中央畜産会編『新たな時代の軽種馬生産』日本中央競馬会、1999年
- 道新スポーツ編『北の蹄音ホッカイドウ競馬四十年史』道新スポーツ、1989年
- 地方競馬全国協会編『地方競馬史第一巻』地方競馬全国協会、1972年
- 地方競馬全国協会編『地方競馬史第二巻』地方競馬全国協会、1974年
- 畜産行政史編纂委員会『畜産行政史－戦後半世紀の歩み－』中央畜産会、1999年
- 古林英一「農用馬の活用による地域振興」北海学園大学開発研究所『開発論集』第80号、2007年
- 古林英一「産地競馬としての「ホッカイドウ競馬」」北海学園大学経済学会『経済論集』第49巻1号、2001年
- 古林英一「日本競馬の現状と制度改革コスモバルクとハルウララの意味すること」ギャンブリング・ゲーミング学会『ギャンブリング・ゲーミング研究』創刊号、2004年
- 古林英一「もうひとつの競馬・ばんえい（幌曳）」ギャンブリング・ゲーミング学会『ギャンブリング・ゲーミング研究』第3号、2007年

古林英一「幌馬大会から幌曳競馬へ1960年の資料より (1)」日本ウマ科学会『ヒポファイル』No. 26、2007年

北海道ばんえい競馬馬主会・調騎会事務局編『15周年記念誌』北海道ばんえい競馬馬主会・北海道ばんえい競馬調騎会、1977年

北海道馬産史編集委員会『蹄跡つめあと』北海道馬産史編集委員会、1983年

北海道競馬事務所『競走成績』北海道競馬事務所、歴年

北海道市営競馬組合『ばんえい競馬競走成績書』北海道市営競馬組合、歴年

岩崎徹『競馬社会とみると、日本経済がみえてくる』源草社、2002年

神翁顕彰会編『続日本馬政史一』神翁顕彰会、1963年

軽種馬生産経済問題検討委員会『軽種馬生産の経済』日本中央競馬会、1991年

小山良太『競走馬産業の形成と協同組合』日本経済評論社、2004年

日本馬事協会「日本の馬産・戦後50年のあゆみ」編集委員会編『日本の馬産・戦後50年のあゆみ』1999年

日本中央競馬会十年史編纂委員会『日本中央競馬会十年史』日本中央競馬会、1965年

日本中央競馬会総務課編『日本中央競馬会20年史』日本中央競馬会、1976年

日本中央競馬会広報室編『日本中央競馬会30年史』日本中央競馬会、1985年

日本中央競馬会札幌競馬場『札幌競馬場100年史』日本中央競馬会札幌競馬場、2007年

日本軽種馬協会編『日本軽種馬協会50年史』日本軽種馬協会、2005年

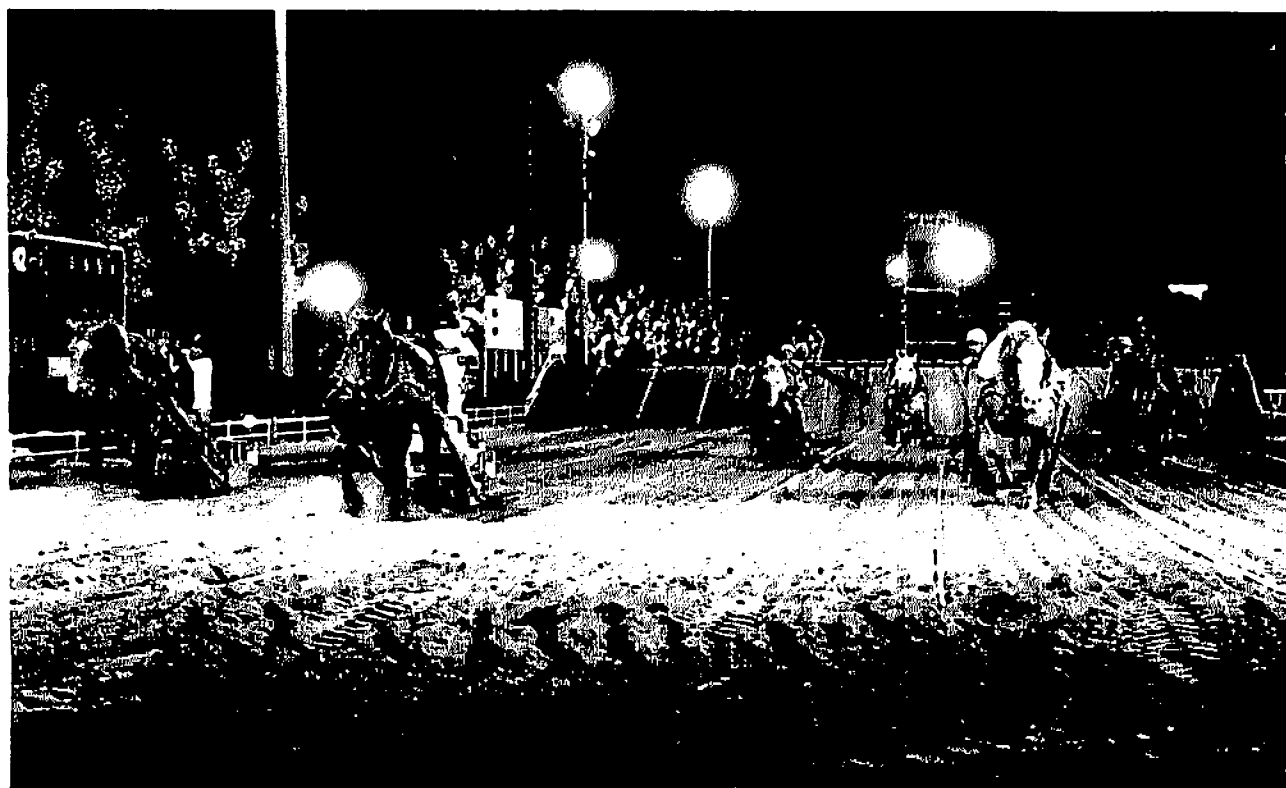
寺島敏治『馬産王国・釧路』釧路新書、1991年

内田靖夫『ばんえいまんがどくほん』北海道市営競馬協議会、1978年

宇井延壽『日本の競馬Ⅰ－法令等の変遷と主要事項－』近代文芸社、1999年

和田清『馬券ばかりが競馬じゃない』北海道新聞社、1994年

山崎英雄編『大地とともに鎌田家の百年』鎌田正・鎌田管仲、1984年



新生ばんえい競馬（帯広競馬場）（松井 和實氏撮影）

は じ め に

60～70年前には、私たちの周りには働く馬がたくさんいました。しかし、今では身近に馬を見ることができなくなりました。大げさかもしれませんが、馬と人との6千年の係わりの中で生まれた相互の絆が、日本では消えかかっているともいえます。人類の歴史の中でかけがえの無い存在であった馬たちを再び身近に呼び戻すことはできないだろうか？ 昨年（2007年）、ばんえい競馬の存続運動を契機に設立されたNPO法人とかち馬文化を支える会では、馬文化の啓蒙活動を開始しました。

今回は、社団法人日本馬事協会の平成19年度家畜生産技術向上等特別対策事業（馬生産技術向上推進事業）として北海道地域の馬事知識普及公開セミナー用テキストを作成する機会を与えていただきました。テキストの執筆は、当NPO法人の理事を中心に行うことにしましたが、内容によってはより専門の近い方にもご協力を頂きました。ただし、短期間でのテキスト作成となり、執筆者にはたいへんなご迷惑をおかけし、恐縮しております。本当にご協力ありがとうございました。

平成20年度からはこのテキストを活用した公開セミナーを計画しております。当NPO法人としてはこのような事業は初めての試みであり、試行錯誤の事業ということもできます。しかし、「馬をふたたび身近な動物として社会の中に呼び戻したい」という熱い想いを胸に努力していく所存であります。どうぞ皆様のご理解とご支援を宜しくお願い申し上げます。

平成20年 3 月23日
(第40回ばんえい記念の日に)

特定非営利活動法人 とかち馬文化を支える会
理事長 柏村 文郎

著者紹介（執筆順）

旋丸 巴 作家，NPO理事

(dzm01622@nifty.com)

古林 英一 北海学園大学経済学部教授，NPO理事

(a-ichi@mba.nifty.ne.jp)

河合 正人 帯広畜産大学畜産生命科学研究部門講師

(kawaim@obihiro.ac.jp)

三宅 陽一 帯広畜産大学臨床獣医学研究部門教授，NPO理事

(miyake@obihiro.ac.jp)

持田 裕之 (有)ウエスタンワールド D-Jランチ代表取締役，NPO理事

(d-jbranch@h2.dion.ne.jp)

柏村 文郎 帯広畜産大学畜産生命科学研究部門教授，NPO理事長

(kashiwa@obihiro.ac.jp)

川島 種朗 KAZ HORSE TRAINING代表

(uma-kawashima@lake.ocn.ne.jp)

表紙写真 山岸 伸

目次

はじめに

第1章	北海道の馬文化	旋丸 巴	1
第1節	馬が継承する文化		1
第2節	信仰にみられる馬文化		5
第3節	文学が描く馬文化		6
	おわりに		7
第2章	北海道の馬と競馬の歴史	古林 英一	8
第1節	北海道の馬産		8
第2節	近代競馬の誕生と成長		10
第3節	道営ホッカイドウ競馬(北海道地方競馬)		12
第4節	ばんえい競馬		15
第3章	道産子(どさんこ)の世界	河合 正人	19
第1節	道産子の生い立ち		19
第2節	道産子の飼養頭数の推移		19
第3節	道産子の体格		20
第4節	道産子の毛色		22
第5節	道産子の放牧管理		25
第4章	農用雌馬の最近の繁殖管理	三宅 陽一	29
第1節	雌馬の繁殖生産性		29
第2節	雌馬の繁殖機能を支配するホルモンとその調節および繁殖特性		30
第3節	発情と排卵の誘起および人工授精の活用		31
第4節	雌馬の繁殖障害と治療		33
第5節	子馬の適切な管理		36
第5章	馬の心理と調教	持田 裕之	38
第1節	馬の心理		38
第2節	馬の調教理念		39
第3節	実践的調教方法		40
第4節	調教方法の具体例		43
第5節	馬の心理と調教の理想		44
第6章	馬の感覚と行動特性	柏村 文郎	46
第1節	視覚		46
第2節	聴覚		47
第3節	嗅覚		48
第4節	音声		49
第7章	乗馬の基礎知識(ウエスタン)	川島 種朗	51
第1節	ウエスタン乗馬の基本理念		51
第2節	乗用馬の種類(品種、特徴)		51
第3節	馬具、馬装、騎乗時の服装		51
第4節	安全な乗馬、下馬		53
第5節	ウエスタン乗馬の基本姿勢		54
第6節	乗馬法		54
第7節	歩法		54
第8節	競技		55

第2章

北海道の馬と競馬の歴史

第1節 北海道の馬産

1. 北海道馬産小史

かつて馬のいなかった北海道にいつ馬がもたらされたかを正確に知ることはできないが、上ノ国町にある15～16世紀頃の遺跡から馬の骨が出土しており、この時期には馬がすでに北海道にいたことが確認される。18世紀末から19世紀にかけ、馬は北海道の各地に広がったとされる。

1870年開拓使が設置され本格的に北海道の開発が始まった当初から馬産は重視されていた。当時の北海道で飼養されていた馬はドサンコであった。馬格の小さいドサンコは駄載用・乗用としては使い勝手がよかったが、プラウやハローといった農具を曳いたり、馬車や櫓を曳くためには非力であり、まず在来馬の大型化が馬事改良の重要な課題となった。

馬は産業の担い手であると同時に重要な兵器でもあった。1901年の北清事変（義和団事件）や1904年の日露戦争を契機として、政府は馬政局（当初は内閣直轄、後に陸軍省）を設置し、計画期間30年という長期的な馬事改良に着手する（第一次馬政計画）。馬事改良の拠点として全国3か所に種馬牧場が設置されたが、そのうち2か所（日高、十勝）は道内に設置された（もう1か所は奥羽）。

この第一次馬政計画のもとで、サラブレッド、アラブ、ベルシュロン、ノルマン、ハクニー、アングロ・ノルマン、トロッターなど数多くの洋種種牡馬が導入された。そのなかの1頭が1910年11月に十勝種馬牧場に配置されたイレネー号（1908年3月14日～1928年5月22日）である。イレネー号は優秀な繁殖成績を残し、十勝地方はベルシュロン系馬の産地となった（十勝ベル）。ばんえい競馬の重賞競走イレネー記念はその功績を記念したものである。また、帯広競馬場入口にはイレネー像がある。ただし、このイレネー像は1930年に建設された最初のものではなく1964年に再建されたものである。

だが、ベルシュロンは馬格が大きく駄載用には適していなかったことから、軍馬としては評価されなかった。牽引力に優れ、日本人の体格にも合

った馬をつくろうという試みもおこなわれた。釧路の馬産家・神八三郎が作りだした日本釧路種（1932年発表）や奏上釧路種（1938年発表）といった馬はそうした試みから生まれた馬である。

1945年8月の第2次世界大戦終結以降軍馬の需要は消失したが、食糧増産・産業復興のため馬の需要は大きかった。馬の増産がはかられ、北海道内の飼養頭数も1953年には29万6千頭に達し、第二次大戦前のピークであった29万8千頭に近い水準に達した。しかしながら、その後はモータリゼーションの普及によって都市鞍馬の需要が激減し、また1950年代終わり頃から農業の機械化が飛躍的に進展し農馬の需要も激減した。

2. 軽種馬の生産

サラブレッド、アラブ、アングロ・アラブ（アラブとサラブレッドの混血種）、およびそれらの雑種（軽半血）をわが国では軽種馬と総称している。図2-1はわが国の軽種馬生産の長期的推移をあらわしている。バブル経済崩壊直後の1993年には12,591頭まで膨らんだ軽種馬の生産頭数は、その後年々減少を続け、2006年にはついに8,000頭を割り込んで7,680頭にまで減少した。7,680頭の95.9%に相当する7,365頭が北海道生まれである（図2-2）。

軽種馬の生産頭数は競馬の成長とともに増加し、日高地方では、1970年代になると米の減反政策の転作作目として軽種馬を選択する農家が多く、その結果、家族経営による小規模な牧場が数多く生まれた。

バブル崩壊後、競走馬需要が縮小するなか、軽種馬生産は厳しい状況に追い込まれていく。一部の良血馬は高く売れるものの、地方競馬を主たるマーケットとしていた比較的種付け料の安い馬は売れなくなった。加えて外国産馬との競合もある。そのため、無理をして高額な良血馬の種付けをおこなったものの、産駒を思うように販売できず、結果的に大きな負債をかかえ、倒産する牧場も数多くみられる。肉牛や他の作目に転換化する牧場も少なくない。

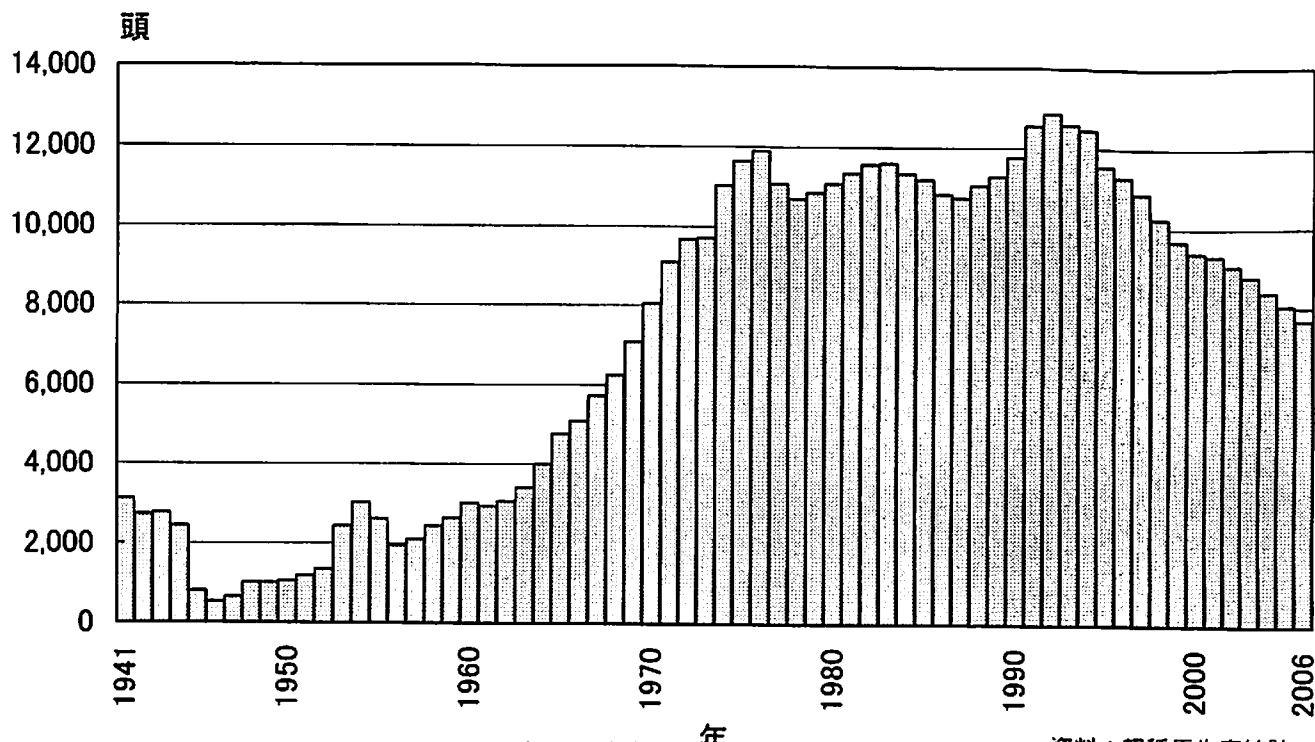


図2-1 軽種馬生産頭数の推移

資料：軽種馬生産統計

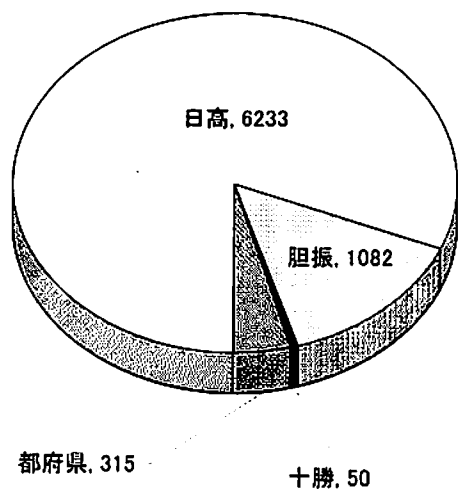


図2-2 地域別軽種馬生産頭数(2006年)

資料：軽種馬生産統計

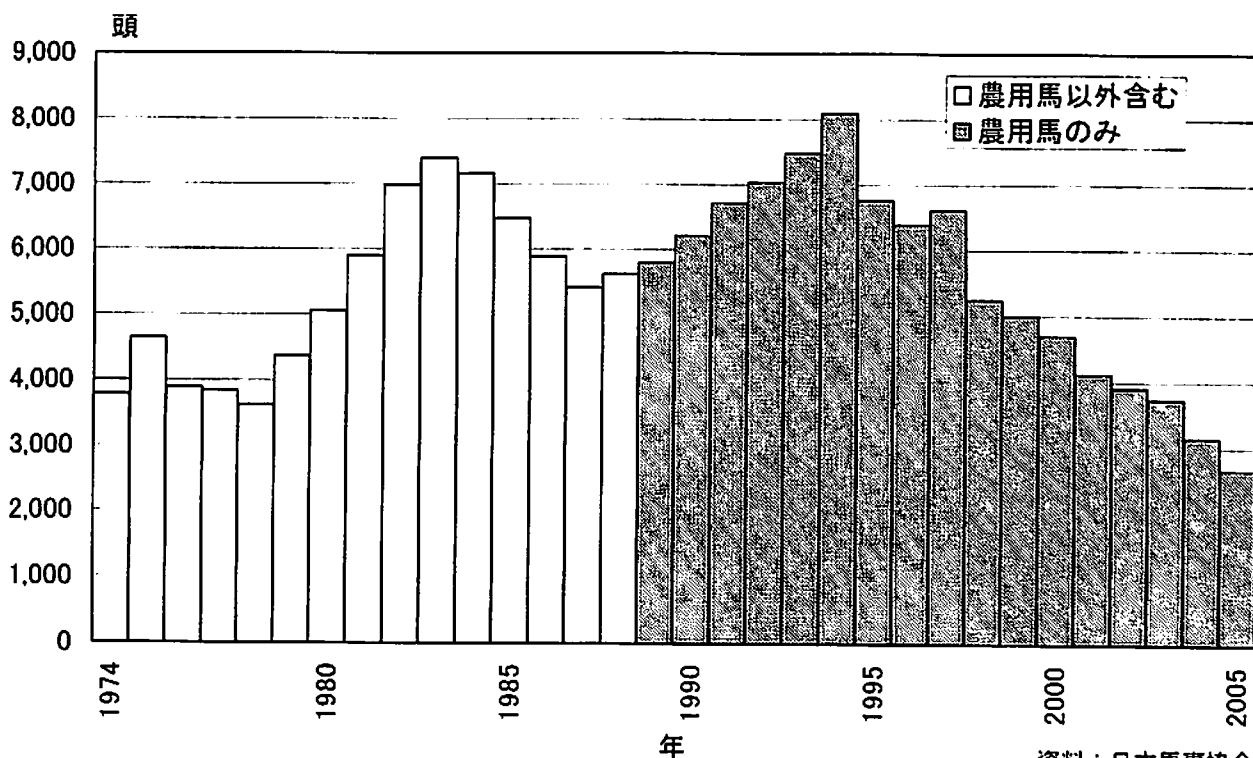
3. 農用馬（重種馬）の生産

統計などで用いられる農用馬という用語は農耕に使用される馬のことではない。ペルシュロン、ブルトン、ベルジャンといった大型の洋種馬、もしくはそれらをかけあわせてつくられた大型馬（2003年産以降は日本挽系種と呼称）の総称である。ばんえい競馬の競走馬といった方がわかりやすいかもしれない。図2-3は農用馬の生産頭数の推移をあらわしたものである。この30年あまりをみると、先にみたサラブレッドの生産動向とほぼ同じ推移を示していることがわかる。

とはいえ、ばんえい競馬の競走馬として供用される農用馬はごく一部に過ぎない。北海道で生産される農用馬の大部分は熊本などに送られ馬肉用に肥育されている。数量的に圧倒的多数が肉用素馬になるとはいえ、農用馬の生産者にとっては、それはあくまで結果であり、生産の基本的な目的はばんえい競走馬である。このことは、ばんえい競馬の馬券発売額と農用馬生産頭数が同じ推移を描いていることからもうかがわれる。つまり、競馬人気が高ければ、競走用農用馬も高く売れ、それが農用馬生産のインセンティブになっているのである。

ばんえい競馬の項でもふれるが、根強い馬肉需要が存在することで、北海道の農用馬の生産は存続しえたのである。つまり、副業的・趣味的におこなわれている農用馬生産を下差さえしているのが馬肉需要であるともいえよう。ばんえい競走馬の需要は年間200頭程度に過ぎない。ばんえい競馬が衰退すると、生産者の多くは農用馬生産から撤退せざるを得ず、競走馬の資質は著しく低下し、結果的にばんえい競馬は存続しえなくなるであろう。

ばんえい競馬の売上高が減少するなかで、競走用農用馬の価格は低落し、肉用馬の価格に接近してしまっているのが現状であるが、それでも競走馬として高く売れる可能性があるという経済的イ



資料：日本馬事協会

図2-3 農用馬生産の推移

ンセンティブがあって、農用馬生産が維持されているのである。

第2節 近代競馬の誕生と成長

1. 近代競馬

わが国における洋式競馬は1861年に横浜居留地の居留民の手によって開催されたのが嚆矢であるとされている。ただ、わが国の競馬が明治期に全く白紙の状態から始まったのかといえばそうではない。例えば各地の神社では祭礼に競馬をおこなっていた。このように考えると、わが国の近代競馬は、古くから存在した祭典競馬を基盤として、西洋から導入された競技が根を下ろし成立したものといえる。

北海道では、1872年札幌神社（現在の北海道神宮）の祭典で競馬をおこなったのが嚆矢とされている。1879年には共同競馬会社が設立され、これが後の札幌競馬倶楽部となり現在の中央競馬の源流のひとつとなった。

また、函館では札幌より早く1860年代前半に祭典競馬がおこなわれた。1883年には北海道共同競馬会社が設立され、海岸町に洋式の競馬場が開設された。これが現在の函館競馬場であり、北海道

共同競馬会社は後に函館競馬倶楽部となりこれも中央競馬の源流のひとつとなった。

札幌・函館以外でも道内各地でも競馬はおこなわれていた。例えば、帯広では1897年に開催されたのが競馬の発祥であるというし、旭川では1911年に皇太子行啓の際に競馬が開催されその後陸軍の年中行事となった。また、岩見沢では1890年に競馬場がつくられ、翌1891年には祭典奉納競馬がおこなわれたといわれる

2. 競馬の制度化

軍馬改良を目的に、1904年に臨時馬政調査委員会は全国に産馬組合と競馬会を組織させ、競馬の振興をはかることとした。1907年から翌年にかけて、全国15の競馬会が設立された。北海道では函館（1907年）と札幌（1908年）に競馬会が設立された。

1908年に公布された競馬規程では競馬会以外に競馬の開催は認められていなかったが、1910年には地方長官の許可に基づく畜産団体による競馬が認められるようになった。

1908年10月の新刑法で馬券発売は禁止された。しかしながら、馬匹改良のための競馬は必要とされ、1923年の競馬法施行までは競馬場の維持管理

費用や賞金が政府からの補助金として交付される時代が続いた。この時代、北海道では、札幌、函館の各競馬会が開催する競馬の他に、日高、十勝、上川の各畜産組合が競馬を開催した記録が残っている。

3. 公認競馬と地方競馬

1923年競馬法が成立し馬券の発売が認められた。競馬法に基づいて、全国11の競馬倶楽部に競馬開催が認可された。北海道では札幌競馬倶楽部と函館競馬倶楽部2つである。競馬法に基づいて開催された競馬を公認競馬という。

1927年地方競馬規則が制定され、地方競馬という言葉がこのとき正式に生まれた。馬券の発売は公認競馬だけに認められ、地方競馬では馬券の発売は認められなかったが、地方競馬では優勝馬投票券付入場券の発売がおこなわれた。優勝馬投票は景品券が的中者に与えられることになっていたが実際には事実上の馬券であったようだ。

道内では各支庁1か所ずつの計14か所で優勝馬投票が認められた。14競馬場の開催成績をまとめたのが表2-1である。1932年秋季を例にとると、入場券売上高の合計は353,737円80銭であった。1937年の札幌競馬場（公認競馬）7日間の馬券の売得金額が863,950円であったことをみると、当時の地方競馬の売上高が決して少ないものではなかったことがわかる。

地方競馬は、本来、農耕や運搬用に飼養されている馬を使うものであったし、政策的にもそう位置づけられていたが、実際には公認競馬への出走をめざす馬や、公認競馬で走っている馬をアルバイト的に出走させたりしたケースが相次いだ。

公認競馬側は地方競馬との混乱を嫌い、1935年以降公認競馬出走馬が地方競馬に出走した場合は再び公認競馬に出馬登録することを認めない、公認競馬で騎乗した騎手が地方競馬に騎乗した場合は二度と公認競馬への騎乗は許さないといった規制を設けた。ただし、後者については、札幌・函館両倶楽部については例外としていた。こうした設けられた地方競馬との「壁」は第二次大戦後も長らく引き継がれることとなった。

1936年5月競馬法改正案が成立し、同年12月公認競馬の全国統一組織である日本競馬会が誕生する。日本競馬会の誕生により各地の競馬倶楽部は解散した。

4. 戦時統制期

1939年種馬統制法と軍馬資源保護法が制定された。軍馬資源保護法によってこれまでの地方競馬は鍛錬馬競走に衣替えし、競馬場も鍛錬馬場と名称が変更された。鍛錬馬競走は各府県1か所、北海道は3か所以内と定められ、道内の地方競馬は、旭川、岩見沢、帯広の3か所以外はすべて廃止された。なお、この軍馬資源保護法にもとづく鍛錬

表2-1 第2次大戦前の北海道における地方競馬

競馬場	所在地(当時)	主催者	1927	1928	1929	1930	1931	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938	日数 合計	有料入場 人数累計	入場券発売 額
			春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋			
江別競馬場	札幌郡江別町	札幌産馬畜産組合		3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	66	200,452	636,312.00
八雲競馬場	山越郡八雲町	道南畜産組合					3	3	3	3	4	3	3	3	40	49,821	209,811.00
今金競馬場	瀬棚郡利別村	檜山畜産組合						3	3						6	9,386	11,761.00
倶知安競馬場	虻田郡倶知安町	後志畜産組合				3	3	3	3	3	3	3	3	3	51	117,337	340,003.00
羽幌競馬場	苫前郡羽幌町	手塩国畜産組合			2	2	2	2	2		3	3		2	27	48,618	60,371.50
稚内競馬場	宗谷郡稚内町	宗谷畜産組合		3	3	2	2	3	2	2	3				20	13,938	33,235.00
根室競馬場	根室郡根室町	根室畜産組合				3	3	3	3	3	3	3	3	3	52	346,250	502,038.00
苫小牧競馬場	勇払郡苫小牧町	胆振畜産組合		3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	51	82,662	299,707.00
日高競馬場	静内郡静内町	日高畜産組合			3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	36	45,390	93,734.00
釧路競馬場	釧路郡鳥取村	釧路畜産組合						3	3	3	4	3	4	4	42	276,278	463,377.00
野付牛競馬場	常呂郡野付牛町	北見畜産組合		3	3	3	3	3	3	3	3	4	3	4	66	152,097	371,367.00
岩見沢競馬場	空知郡岩見沢町	空知畜産組合	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	72	175,451	663,424.00
旭川競馬場	旭川市	上川畜産組合		3	3	3	3	3	3	3				4	45	173,557	390,752.00
帯広競馬場	帯広市	十勝畜産組合	2	3	2	3	3	3	3	3	3	4	3	4	75	368,579	683,567.20
開催日数計			5	6	20	24	17	28	28	32	29	34	36	40	649	2059816	4,759,459.70

資料:『地方競馬史 第1巻』

馬競走では優等馬票の発行が認められた。

戦局悪化の中で競走馬資源も枯渇し都市部では競馬を開催できる状況ではなくなったため、公認競馬は1943年を限りに中止となり、馬券発売をおこなわない能力検定競走が1945年まで細々とおこなわれた。また1939年にはじまった鍛錬競走も1944年に幕を閉じた。

1945年8月の第二次大戦終結でいわゆる戦時法令は順次廃止となる。馬産・競馬関係では、同年11月に軍馬資源保護法が廃止され、12月の国家総動員法廃止にともなって馬事団体令による団体が自然消滅となった。これら一連の出来事によって、競馬の根拠法が消滅してしまう。

第3節 道営ホッカイドウ競馬 (北海道地方競馬)

1. 進駐軍競馬と馬連競馬

日本競馬会による公認競馬は1946年10月から東京・京都の2場で復活するが、地方競馬はそれよりも早く変則的なかたちで復活する。1946年6月札幌駐留軍が7月14日のアメリカ独立記念日に競馬を開催するよう北海道庁に命令した。道庁は競馬の開催実務を馬匹組合連合会（馬連）に委託し札幌競馬場で競馬が開催された。この時期、法に基づかない競馬（無法競馬、ヤミ競馬、国民競馬などとよばれた）が全国各地で続々と開催され、道内でも函館や室蘭でも競馬が開催されたという。

1946年11月地方競馬法が公布・施行された。ちなみにこの法律は戦後の議員立法第1号であるという。地方競馬法では競馬の主催者は馬連もしくは馬匹組合とされた。

地方競馬法にあわせて定められた地方競馬施行規則第9条で、競走の種類として、駈歩・速歩・障碍の3つに加え、新たに鞍馬が盛り込まれた。このときばんえい競馬が法的に制度化されたのである。

1947年春に地方競馬法が改正され、道内3か所以内とされていた競馬場数が6か所以内になった。これを受け、旧来の岩見沢・旭川・帯広の3場に加え、北見と室蘭でも新たに競馬が開催された。また、この年は馬連主催とは別に、中央馬事会的主催で北海道地方連合地方競馬が岩見沢で開催されている。

2. 道営競馬のスタート

1948年6月連合軍総司令部（GHQ）は日本競馬会、中央馬事会（日本馬事会の後継団体として1945年11月設立）、馬匹組合連合会などを閉鎖機関に指定した。これによって地方競馬の主催団体が消失してしまう。そこで急遽制定されたのが現在の競馬法である。

新しい競馬法では競馬を行うことができるのは政府または都道府県と規定された。日本競馬会が行っていた公認競馬は政府が引き継ぎ国営競馬となり、馬連などの行っていた地方競馬は都道府県が引き継いだ。道営競馬の誕生であった。初の道営競馬は1948年9月23日に帯広で開幕した。ちなみに開幕初戦は騎乗速歩競走であったという。

また、この年、道内の重要拠点として小樽市銭函に小樽競馬場が誕生し、道営競馬の拠点として期待された。小樽競馬場では道営がスタートした1948年に2回8日間が開催され、この年の道営の総売得金額の56%にあたる2,668万円を売り上げた。

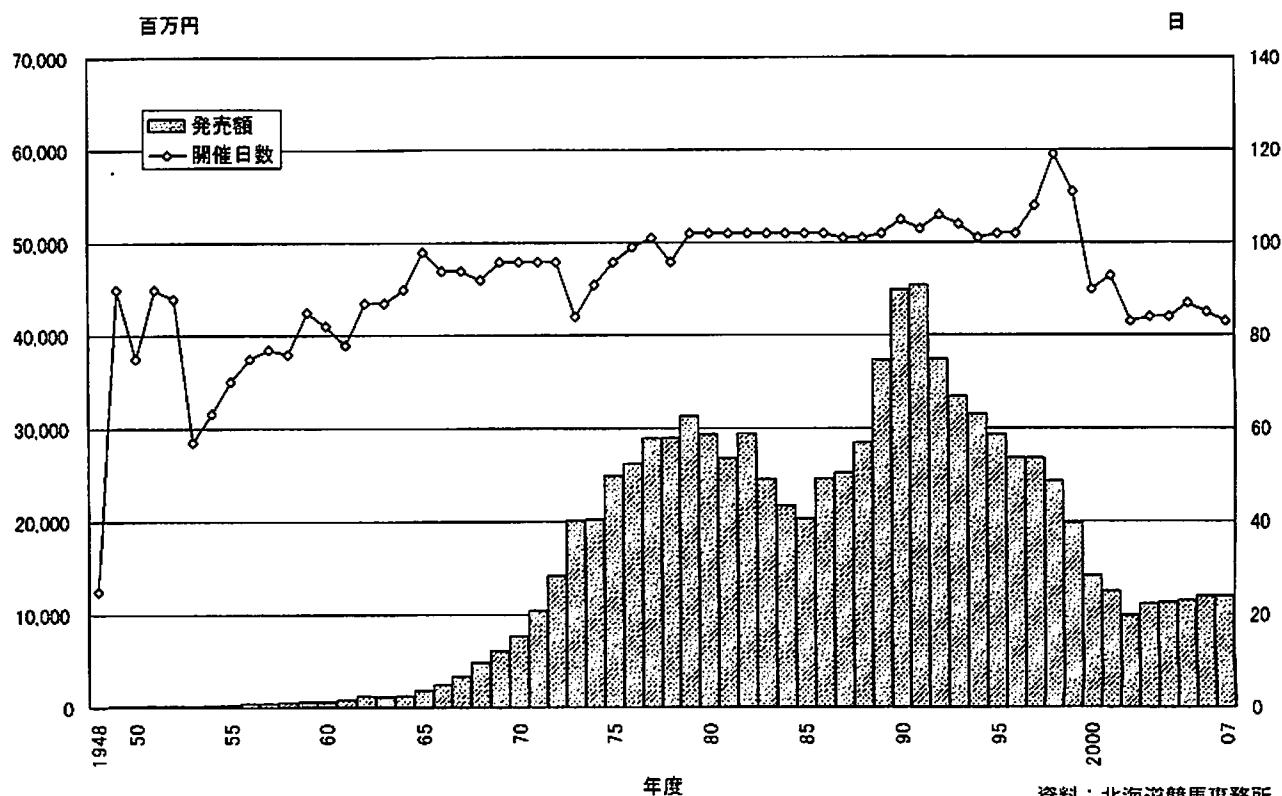
競馬法にしたがって、米軍施政下にあった沖縄県を除く全ての都道府県で地方競馬が開催されたものの、その殆どはわずか数年で廃止されてしまう。道営競馬も不振が続き、1950年から1955年の6年間は赤字となり存廃論議がおこった。多くの府県で競馬が続かなかった理由はいくつか考えられる。

まず、1つめは「ドッジ不況」、2つめは続々と誕生した他の公営競技との競合、そして3つめが競走馬資源の不足である。地方競馬の競走馬は軽種馬以外のアングロノルマンなどの中間種が主体でその大部分は使役馬であった。道営競馬ではドサンコ（北海道和種）によるレースや馬車馬による速歩競走などの珍企画が生み出されたり、26歳という高齢馬が出走・勝利したケースがある。

3. 道営競馬の変遷

1956年の競馬法改正で、競馬場所在地の市町村が指定を受け、競馬を主催することができるようになった。北海道では、帯広、北見、岩見沢、旭川の4市が指定を受け、1953年から市営競馬を開催した。

図2-4は道営競馬の発売額の推移をあらわした



資料：北海道競馬事務所

図2-4 道営競馬の発売額と開催日数

たものである（1965年までは道営のばんえい競走を含む）。1950年代前半の危機的状況を何とか乗り切り、道営競馬は順調に売上高を伸ばす。1950年代後半になるとわが国は高度経済成長期にはいる。

1960年代後半から1970年代の終わり頃まで、中央・地方ともに競馬の売上高は成長を続けまさに黄金時代であった。1970年代半ばには第一次オイルショックによる深刻な景気の後退もあったが、その時期でも競馬の発売額は伸び続けた。そのため「不況に強いギャンブル産業」という神話が生まれたが、これはたまたま第一次オイルショック期がそうだったというだけで全くの神話に過ぎない。図をみても明らかのように、1950年代初期、第二次オイルショック期、円高不況期、そしてバブル崩壊後と大きな景気の後退期には道営競馬の馬券発売額は減少している。

1979年の312.6億円をピークに馬券の発売額は低下を続け、1983年にはついに単年度赤字を計上する。道営競馬のみならず、地方競馬がおよそ30年振りに迎えた危機の時期であった。この時期、南関東の川崎競馬でさえ存廃論議がおこったほどであった。しかしながら、それまでの蓄積もあり、このときに廃止となったのは和歌山県の紀三井寺

競馬だけであった。紀三井寺競馬は冬季休催期間中の道営競馬の出稼ぎ場所でもあった。門別トレーニングセンターが竣工したのが1985年であった。

1980年代後半になると、バブル景気により、馬券の発売額は大きく増加し経営危機は回避された。

4. 長期低迷期の道営競馬

バブル崩壊後の長期低迷は深刻な地方競馬の危機をもたらした。1990年代後半になって全国の地方競馬は再び存廃論議にさらされる。また、競馬ファンは単なるギャンブルとしてではなく、より質の高いレースを競馬に求めるようになっていた。少ない競走馬資源で営まれる地方競馬が高度化するファンの要求に応えられるわけもない。

こうした状況に風穴をあけるべく、1990年代半ばになって中央・地方の交流が本格的に開始される。1995年は交流元年といわれ、中央・地方の統一グレード競走（ダートグレード競走）がおこなわれるようになった。道営競馬でもそれまで招待競走だったブリーダーズゴールドカップが交流重賞（GⅡ）となり、グランシャリオカップ（GⅢ）が新設された（1996年）。翌97年には北海道スプリントカップ（GⅢ）が新設、北海道2歳優駿（当時の呼称は北海道3歳優駿）が交流重賞（GⅢ）

となり、さらに98年にはエーデルワイス賞（GⅢ）が新設された。

道営競馬の収支均衡をはかるべく、収入（馬券売上高）の増大と、支出（開催経費の削減）の両面からいくつかの方策がとられた。ミニ場外発売施設（愛称Aiba）の設置は収入増大策のひとつである。Aibaの第1号は2001年に馬産地日高の静内に設置されたAiba静内で、その後、2002年から2005年にかけて全道10か所に設置され、2008年1月現在では11か所が稼働しファンを楽しませている。

道営競馬の存廃論議が高まるなか、1999年11月、北海道地方競馬運営委員会（岩崎徹委員長、当時）が北海道知事の諮問に対する答申をおこなった。この答申（通称、岩崎答申）は、道営競馬は「産地競馬」とし、財政寄与にとどまらない道営競馬の多面的な機能を積極的に評価し、道営競馬の存在意義を明らかにした。

道営競馬は2歳馬の出走比率が高いが、これら2歳馬の多くは3歳以降、道営に留まることなく、中央競馬をはじめ、南関東や他の地方競馬に転出する。道営競馬のもつこうした流通機構としての機能が「産地競馬」の1つの側面である。

道営競馬のこうした機能をより強化・推進したのがJRAの認定競走制度であり、2003年に設けられた認定厩舎制度である。認定厩舎制度は、サラブレッドの生産・育成をおこなっている牧場と道営競馬の厩舎がタイアップする制度である。この認定厩舎制度第1期生としてデビューしたコスモバルクが、中央競馬の皐月賞で2着（2004年4月）したり、国際G1競走であるシンガポール航空国際カップを優勝（2006年5月）したりという大活躍をみせ、道営競馬の人気回復に大きく寄与したことは記憶に新しい。

5. 道営競馬の新生にむけて

～北海道競馬改革ビジョン～

2007年、道は道営競馬の大幅な改革プランを打ち出した。改革プランは、ひと言でいえば、道営競馬を産地に立脚する産地主導の競馬として確立するという理念に基づいたものである。

馬産地の人的・資金的支援によって北海道軽種馬振興公社を競走実施公益法人に改組し、この新公社は北海道から競馬の実施に関する事務を受託

する。新公社による競馬の実施で産地の「民間活力」を活用するというのが具体的な方策である。

また2008年の開催をもって旭川競馬場から撤退し、門別競馬場で長期間のナイター開催をおこない本場化することも計画されている。旭川からの撤退が予定通り行われれば、ばんえい撤退による岩見沢に次いで、旭川でも長い競馬の歴史に幕が下ろされることになってしまう。

6. 道営競馬を楽しむ

道営競馬は例年4月中旬から11月上旬にかけて、JRA札幌競馬場、旭川競馬場、門別競馬場の3か所を巡回開催している。開催日程は年によって一定しないが、2008（平成20）年度は、札幌、旭川、門別の順番で開催される予定で、旭川ではナイター開催がおこなわれる。開催日は原則として火水木である。ただし、上述したように、旭川開催は2008年度限りで廃止される予定である。

なんといっても道営競馬の特徴は2歳戦が数多く組まれていることである。道営でデビューし、中央競馬や南関東で大活躍する馬は数多い。

道営競馬の重賞競走は、H1からH3に格付けされており、2007年度を例にとると、2歳馬戦にH1はないが、交流重賞である北海道2歳優駿が2歳馬の最高峰のレースに位置づけられている。また、2歳牝馬の交流重賞としてエーデルワイス賞がある。JRA認定競走に勝った馬は中央競馬への出走が認められるので、中央競馬の夏の函館・札幌開催に遠征し、好成績をおさめる馬も少なく、函館2歳ステークスや札幌2歳ステークスで活躍する馬もいる。

3歳馬では北海優駿がH1に格付けされている。北斗盃（H2）、北海優駿、そして王冠賞（H2）が、いわゆる3歳馬の3冠レース（中央競馬の皐月賞・ダービー・菊花賞に相当）である。

古馬の重賞には、北海道スプリントカップとブリーダーズゴールドカップという2つの交流重賞がある。2000年の北海道スプリントカップでは道営所属の13歳馬オースミダイナーが優勝し、最高齢重賞制覇の記録を打ち立てている。道営所属馬の優勝は残念ながらこのときだけである。

道内における道営競馬は、上述のAibaの他に、JRA札幌競馬場、ウインズ釧路、ウインズ室蘭、JRA函館競馬場、旭川レーシングセンター、ハ

ロンズ岩見沢、帯広競馬場でも場外発売がおこなわれている。

第4節 ばんえい競馬

1. ばん馬大会

重量物を積載した橇を馬で曳いて競い合うばん馬競走（ばん馬大会）がいつ始まったかは定かではない。ばん馬大会は農村娯楽であったと解説されることが多いが、これは必ずしも正確ではない。馬が生まれるのは農家であるが、馬を使役するのは農家とは限らない。牽引力に優れた馬はむしろ運送業者や森林伐採で使役されていた。ばん馬大会は1960年代までは運送業者たちによって道内の都市部でも盛んに開催されていた。

2. 発足当初のばんえい競馬

公式に馬券発売を伴う競馬（以下、ばんえい競馬）としてばん馬競走を行うようになったのは、1946年以降である。地方競馬法に則ってばんえい競走が行われたのは北海道と、馬力大会の伝統をもつ青森県のみであったとされるが、青森県は1951年の開催を最後に競馬そのものが廃止となっている。

1947年に馬連によって岩見沢と旭川で各2日間

開催されたのがばんえい競馬の始まりであるが、このときは予想外の不振で翌48年は開催されなかった。49年に北海道の主催となりばんえい競馬が開催される。

発足当時のばんえい競馬に出走した馬はすべてが普段は産業現場で働く使役馬であった。馬だけではなく騎手も普段馬とともに働く人々であった。

ばんえい競馬は今日の競技形態に至るまで幾多の変遷を経てきた。例えば、現在のばんえい競馬は直線200mのセパレートコースでおこなわれているが、現在のばん馬大会がそうであるように、発足からしばらくの間はU字型のコースで競技がおこなわれており、すべての競馬場が直線セパレートコースになったのは発足後20年以上を経た1968年のことであった。障害も現在は大小2つの山であるが、かつては途中に溝や難路（砂障害）が設置されていた時代もある。橇も現在は鉄製であるが、これは1971年からでありそれ以前は木橇である。

3. 成長と停滞

1970年代に入りばんえい競馬は大きく発展する。図2-5はばんえい競馬の開催日数と馬券発売額の推移である。1960年代後半間66日に留まっていた開催日数は1974（昭和49）年には102日に増え、

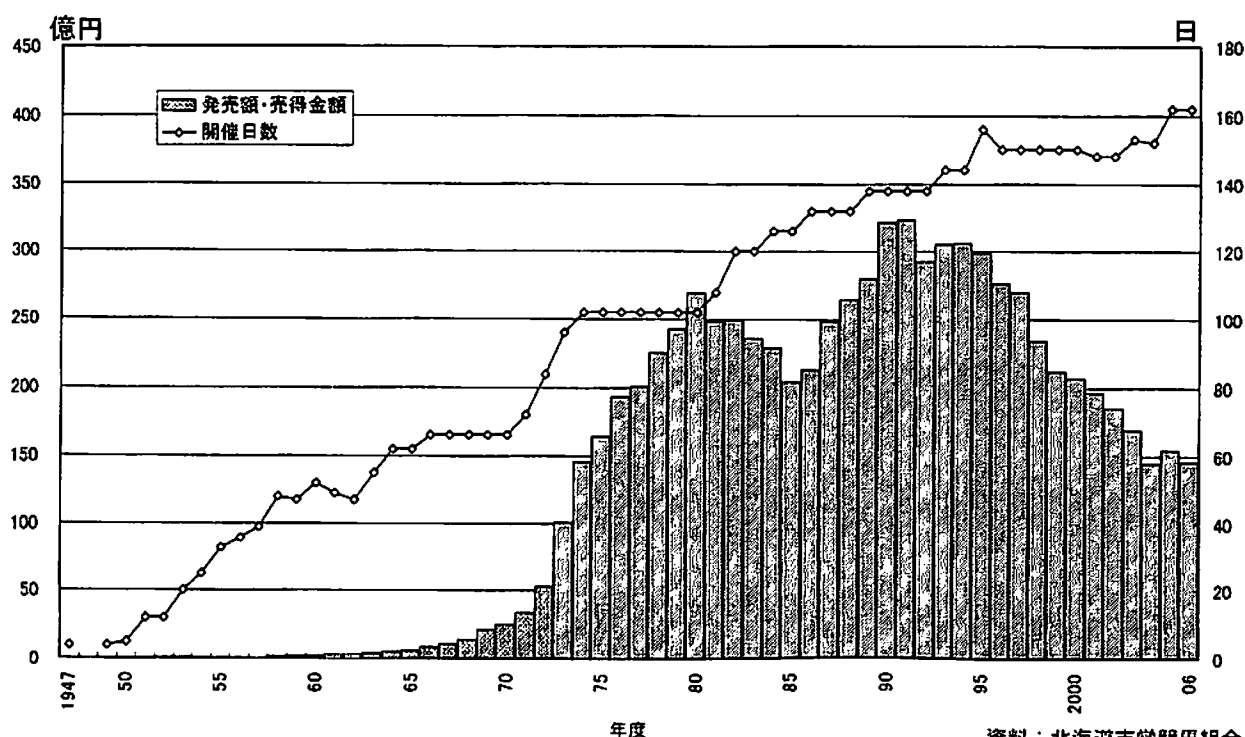


図2-5 ばんえい競馬の発売額と開催日数

資料：北海道市営競馬組合

馬券発売額は1970年の24.8億円が1974年にはその実に5.85倍の145.5億円となっている。発売額の急成長は1980年まで続いた。

1970年代前半のわずか数年間でばんえい競馬は使役馬と使役馬を所有・使役する非専門的騎手によるセミプロ的な競技から、競走専用馬と専門的騎手によるプロ競技に変容をとげた。このことが開催日数の増大を可能としたといえる。この変容を可能とした条件は2つある。

1つは馬券に対する旺盛な需要の存在である。高度経済成長を背景に、公営競技は黄金期をむかえていた。そのなかでもばんえい競馬の馬券発売額の伸びは突出していた。これには、北海道経済の成長と、ばんえい競馬の地盤である道央・道東において競合する競技があまりなかったことによると考えられる。

いま1つは馬産の変容による競走馬資源の供給確保である。すでに第1節で述べたように、使役馬の需要が失われるのに代わり、肉用馬の需要が拡大することで競走馬資源が確保されることとなった。このことは競走馬の劇的な大型化をももたらした。使役馬中心の時代は全体的に今よりもはるかに馬格は小さい。かつては体重が800kgあれば大型馬とされたが、現在なら、デビューしたての2歳馬でも殆どが800kgを超える。

馬券発売額は1980年には269億円に達しピークとなる。だが、道営競馬や他の地方競馬と同様、この頃を境に馬券の発売額は減少に転じる。そのなかで、開催日数の増大、4場の相互場外発売や専用場外発売所などの設置などの対応策がとられたものの、発売額の減少傾向に歯止めをかけることはできなかった。

1986年になると発売額は上向く。これも他の地方競馬と同様である。バブル景気で発売額は年々増加する。そうしたなか1989年4月一部事務法人である市営競馬組合（以下、組合）が設立され、2007年度に帯広市の単独開催になるまで、組合による競馬事業が続けられることとなった。結果論に過ぎないかもしれないが、市営競馬協議会を構成し、4市が直轄事業として競馬を実施していた時代にくらべ、実務的な効率は高まったものの、競馬事業の一切が組合まかせとなり、各市が主催者として積極的な取組を放棄し、それが結果的に3市撤退という事態につながったという見方も可

能であろう。

ともあれ、バブル景気まっただ中、組合設立3年目の1991年には322.9億円という空前の売上高をあげたが、その後は長期にわたる売上減少が続き、1998年にはついに単年度収支が赤字となった。その後も売上高は減少はとどまることなく、市営競馬組合の累積債務は増大し続け、そしてついに2006年秋の3市撤退という最大の危機を迎えることとなった。

4. 新生ばんえい競馬の誕生

バブル崩壊以降長期化した不況は地方経済により強く打撃を与え、赤字を続けるばんえい競馬は4市の大きな財政課題となっていた。2004年有識者による「ばんえい競馬のあり方を考える懇談会」が開かれ、翌年「ばんえい競馬経営再建5箇年計画」が策定されたものの、2005年度は過去最悪の赤字を計上してしまう。2006年3月、ばんえい競馬を構成する様々な関係者による改革検討プロジェクトチームが発足し、9月には存続に向けたプロジェクトチーム案が発表される。だが、プロジェクトチーム案を無視するかのよう、旭川市の菅原市長（当時）が10月にばんえい競馬からの撤退を表明し、北見市もそれに続いた。帯広+岩見沢の2場開催案も最終的には成立せず、岩見沢市も11月27日には撤退を表明した。ばんえい競馬の火はいったん消えようとした。

こうした主催者の動きに対して、ばんえい競馬の存続を求める声が、まず十勝の生産者から起こり、続いて帯広市民を中心とした存続運動が開始された。存続運動は大きな拡がりを見せマスコミも全国的に存廃問題を報道した。

こうした存続運動を背景に、ソフトバンクの子会社で地方競馬の馬券のネット販売をてがけているソフトバンクプレーヤーズが支援を表明し、帯広市は、ソフトバンクプレーヤーズが新たに設立するオッズパークばんえいマネジメントに、競馬法上民間委託ができる業務の大部分を委託することで、帯広市単独主催によるばんえい競馬の存続が実現したのである。

2007年4月新生ばんえい競馬が開幕した。当然のことながら、これまでの4市巡回開催ではなく、帯広市での周年開催である。夏にはばんえい競馬初のナイター競馬も開催され、新たな市民のレジ

ヤーとして多くの人で賑わった。

また、存続運動の過程で、ばんえい競馬を核として馬文化を地域再生の資源として活用しようという機運が生まれ、NPO法人とかち馬文化を支える会が誕生した。NPO法人は馬に関わる様々なイベントを開催し、馬を地域活性化の資源として活用する試みをおこなっている。

ただ、馬券発売高の長期にわたる減少にともなうて、賞金・諸手当（いわゆる報償金）が大きく下がっている。報償費の削減が馬主の競走馬購入意欲を低下させ、その結果、競走馬資源である農用馬の生産頭数が減少し続けている。農用馬生産はばんえい競馬の最も重要な基盤であり、今後のばんえい競馬の存続を左右する大きな問題である。

5. ばんえい競馬の観戦

ばんえい競馬は世界で唯一の競馬である。4月下旬から3月下旬にかけて帯広競馬場で開催されている。2008年度は25開催150日が予定されている。開催日は原則として土日月の3日間である。また5月9日から10月19日の12開催72日間はナイター開催でおこなわれる予定である（ナイター開催期間中は金、土、日）。

走路には大小二つの障碍（盛土）があるが、なんといっても二つめの大きい方の障碍（第2障碍）を越えるところが見所である。第2障碍の上り坂付近で観戦していると、馬の息づかいや騎手のかけ声が聞こえ、ばんえい競馬の迫力を体感することができる。平地競走に比べ格段に速度が低く、第2障碍からゴールまで観客が声援を送りながら馬と一緒に走るのもばんえい競馬ならではの光景である。ただし、ゴール線を櫓の後端が通過した瞬間がゴールインなので、ゴール前に数頭の馬が並んでしまった場合、ゴール前で見ていると櫓の後端が他馬の陰になって着順がわかりにくいこともある。

北海道内の場外発売所は、北見場外発売所、旭川レーシングセンター、岩見沢場外発売所、釧路場外発売所、苫小牧場外発売所、名寄場外発売所、Aiba小樽、Aiba滝川、Aiba中標津、Aiba留萌、Aiba札幌駅前、Aiba千歳、Aiba函館港町、Aiba江別。道外では、BA00高崎、大井競馬場などである。近年ではインターネットやCS放送での中継もおこなわれており、場外発売所以外でもレースを見

ることができる。

重賞競走はBG1からBG3の3ランクに別れており、当該年度デビュー馬のチャンピオンを決定するイレネー記念（3月）、3歳チャンピオンを決定するばんえいダービー、3歳牝馬のチャンピオン決定戦であるばんえいオックス（ともに12月）、5歳馬（オックス・ダービー出走馬より1歳上だが、1月に開催されるので5歳となる）のビッグレースである天馬賞、古馬のビッグレース帯広記念（1月）、古馬のチャンピオン決定戦であるばんえい記念（3月）がBG1に格付けされている。なかでも、ばんえい記念はばんえい重量1トン（牝馬は20kg減）という超高重量戦であり、かつては大臣賞典とよばれ、ばんえい競馬最高峰のレースとなっている。

ばんえい競馬では上位ランクに格付けされるほど積載重量が大きくなる。そのため、平地競走とは逆に上位馬のレースの方が時計がかかる。したがって、ばんえい記念はばんえい競馬の数あるレースでもっとも走破タイムの遅いレースでもある。

【参考文献・資料】

- 中央畜産会編『新たな時代の軽種馬生産』日本中央競馬会、1999年
- 道新スポーツ編『北の蹄音ホッカイドウ競馬四十年史』道新スポーツ、1989年
- 地方競馬全国協会編『地方競馬史第一巻』地方競馬全国協会、1972年
- 地方競馬全国協会編『地方競馬史第仁巻』地方競馬全国協会、1974年
- 畜産行政史編纂委員会『畜産行政史－戦後半世紀の歩み－』中央畜産会、1999年
- 古林英一「農用馬の活用による地域振興」北海学園大学開発研究所『開発論集』第80号、2007年
- 古林英一「産地競馬としての「ホッカイドウ競馬」」北海学園大学経済学会『経済論集』第49巻1号、2001年
- 古林英一「日本競馬の現状と制度改革コスモバルクとハルウララの意味すること」ギャンブリング・ゲーミング学会『ギャンブリング・ゲーミング研究』創刊号、2004年
- 古林英一「もうひとつの競馬・ばんえい（輓曳）」ギャンブリング・ゲーミング学会『ギャンブリング・ゲーミング研究』第3号、2007年

古林英一「幌馬大会から幌曳競馬へ1960年の資料より (1)」日本ウマ科学会『ヒポファイル』No. 26、2007年

北海道ばんえい競馬馬主会・調騎会事務局編『15周年記念誌』北海道ばんえい競馬馬主会・北海道ばんえい競馬調騎会、1977年

北海道馬産史編集委員会『蹄跡つめあと』北海道馬産史編集委員会、1983年

北海道競馬事務所『競走成績』北海道競馬事務所、歴年

北海道市営競馬組合『ばんえい競馬競走成績書』北海道市営競馬組合、歴年

岩崎徹『競馬社会とみると、日本経済がみえてくる』源草社、2002年

神翁顕彰会編『続日本馬政史一』神翁顕彰会、1963年

軽種馬生産経済問題検討委員会『軽種馬生産の経済』日本中央競馬会、1991年

小山良太『競走馬産業の形成と協同組合』日本経済評論社、2004年

日本馬事協会「日本の馬産・戦後50年のあゆみ」編集委員会編『日本の馬産・戦後50年のあゆみ』1999年

日本中央競馬会十年史編纂委員会『日本中央競馬会十年史』日本中央競馬会、1965年

日本中央競馬会総務課編『日本中央競馬会20年史』日本中央競馬会、1976年

日本中央競馬会広報室編『日本中央競馬会30年史』日本中央競馬会、1985年

日本中央競馬会札幌競馬場『札幌競馬場100年史』日本中央競馬会札幌競馬場、2007年

日本軽種馬協会編『日本軽種馬協会50年史』日本軽種馬協会、2005年

寺島敏治『馬産王国・釧路』釧路新書、1991年

内田靖夫『ばんえいまんがどくほん』北海道市営競馬協議会、1978年

宇井延壽『日本の競馬 I - 法令等の変遷と主要事項 -』近代文芸社、1999年

和田清『馬券ばかりが競馬じゃない』北海道新聞社、1994年

山崎英雄編『大地とともに鎌田家の百年』鎌田正・鎌田管仲、1984年



新生ばんえい競馬（帯広競馬場）（松井 和實氏撮影）